

<概要/Course Content Summary >

政府は、2016 年から 2020 年までの 5 年間で射程に納めて、第 5 期科学技術基本計画を策定した。そのなかで、政府は、Society 5.0 という考えかたを提唱している。政府の説明に基づけば、Society 5.0 は、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」である。だから、Society 5.0 は、新たな技術を活用して、ヒトとモノを繋げようとしている。逆に言えば、このような発想の背景には、これまでの社会がヒトとモノを分断的に捉えてきたという把握がある。しかし、19 世紀中葉から 20 世紀初頭にかけて米国で活躍したふたりの哲学者パースとジェイムズは、そのような分断的な捉えかたに意義を申し立てている。かれらは、プラグマティズムという、米国で新たに生まれた哲学的動向を先導した人物である。かれらにとって、仮的世界と現実的世界との境界はあいまいである。ここで問題とすべきは、仮的世界と現実的世界との連なりと繋がりとをどのように理解するのか、その接続のありかたである。それは、仮的世界と現実的世界のコミュニケーションであり、ヒトとモノのコミュニケーションのありかたである。それは、同時に、ヒトとモノのコミュニティのありかたである。それゆえ、本講義では、Society 5.0 ではなく、いっそう核心的な Communication に着目して、Communication と Community とを統合的に Comm 5.0 として一体的に捕捉し、仮的世界と現実的世界、あるいは、ヒトとモノ、ひいては、ヒトとヒト、それらの結びつきを考えていくための基礎を固めていきたい。そのために、パースとジェイムズの所説に照準を定め、かれらの視座について考察を進める。

<到達目標/Goals,Aims >

- 【知識】 Comm 5.0 を実現していくための基礎的な概念を検討できるようになること。
 【技能】 仮的世界と現実的世界、ヒトとモノの融合の視点を展開できるようになること。
 【態度】 Comm 5.0 を通じて新たな価値を創造するための姿勢を培うこと。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
第 1 回 Society 5.0 の概要	講義内容のまとめと文献の読解
第 2 回 Comm 5.0 の考えかた	講義内容のまとめと文献の読解
第 3 回 思想と事物	講義内容のまとめと文献の読解
第 4 回 意識	講義内容のまとめと文献の読解
第 5 回 知る働き	講義内容のまとめと文献の読解
第 6 回 純粋な経験	講義内容のまとめと文献の読解
第 7 回 主体と客体	講義内容のまとめと文献の読解
第 8 回 経験のありかた	講義内容のまとめと文献の読解
第 9 回 知るものと知られるもの	講義内容のまとめと文献の読解
第 10 回 実在	講義内容のまとめと文献の読解
第 11 回 表示と表象	講義内容のまとめと文献の読解
第 12 回 内的空間と外的空間	講義内容のまとめと文献の読解
第 13 回 仮的世界と現実的世界の関係	講義内容のまとめと文献の読解
第 14 回 ヒトとモノのコミュニケーション	講義内容のまとめと文献の読解
第 15 回 Comm 5.0 の視座	講義内容のまとめと文献の読解

授業の進捗状況によっては、計画にずれの生じる場合がある。その都度、教室のなかで確認する。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

- 小レポート 30%
指定した文献を読解できているか。
 小テスト 30%
授業の内容を把握できているか。
 出席 10%
授業に積極的に参画できているか。
 期末レポート試験 30%
立論を論理的に組み立てられているか。

【小レポート】授業の内容に関する英語文献を事前に提示するので、その翻訳を小レポートとして課す。

【小テスト】授業のなかで英語文献の内容を解説するので、各自の翻訳を踏まえながら、授業の内容をまとめる。

【出席】授業に出席し、討論に参加する。

【期末レポート試験】授業の内容のなかから論題を随意に選んで、それについて自由に考察を展開する。

<テキスト/Textbook >

教室のなかで、その都度、指定する。

<参考文献/Reference Book >

教室のなかで、適宜、紹介する。

<備考/Remarks >

e-class を通じて課題を提示するので、e-class 上で課題に取りくむ。

<概要/Course Content Summary >

政府は、2016 年から 2020 年までの 5 年間で射程に納めて、第 5 期科学技術基本計画を策定した。そのなかで、政府は、Society 5.0 という考えかたを提唱している。政府の説明に基づけば、Society 5.0 は、「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」である。だから、Society 5.0 は、新たな技術を活用して、ヒトとモノを繋げようとしている。逆に言えば、このような発想の背景には、これまでの社会がヒトとモノを分断的に捉えてきたという把握がある。それと同じように、日本の大学入試制度の影響もあって、日本では、文系的な学びと理系的な学びの乖離は大きい。おそらく、その要因は、文系的知識と理系的知識のそれぞれの違いにある。理系的知識は、数学という厳密な形式的言語に基づく、自然にかんする定量的把握に関与している。他方、文系的知識は、あいまいさを残しつつも豊かな自然言語を駆使して、もろもろの事象にかんする個人的な感じかたの一般的把握をめざす。Society 5.0 は、ヒトとモノの分断を乗り越えようとする社会であるから、そこには、文系的知識と理系的知識のコミュニケーションがなければならないはずである。それは、同時に、文系的知識と理系的知識との共同体、すなわち、コミュニティを形成する。本講義では、そのようなコミュニケーションとコミュニティを相補的に成立させていく社会の一体的な様態を、Society 5.0 ではなく、Comm 5.0 として定位し、文系的知識と理系的知識を連続的に通覧するための足場を固めたい。そのときに手がかりになるのは、19 世紀後半から 20 世紀中葉にかけて英国と米国で活躍した数学者でもあり哲学者でもあるアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの考えかたである。かれの代表的な著作を繙きながら、物理学が明らかにしようとしている自然の実相を哲学的に捉えなおし、文系的知識と理系的知識を架橋するための視角の醸成に取りくむ。

<到達目標/Goals,Aims >

- 【知識】 文系的知識と理系的知識の融合にとって鍵となる概念の意味を理解できるようになること。
 【技能】 文系的知識と理系的知識とを結びつけて多角的にことごとを掴めるようになること。
 【態度】 対立しているように見える二つのことごとを連続的に捉えていけるようになること。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
第 1 回 Society 5.0 の概要	講義内容のまとめと文献の読解
第 2 回 Comm 5.0 の考えかた	講義内容のまとめと文献の読解
第 3 回 質的世界と量的世界	講義内容のまとめと文献の読解
第 4 回 宗教改革と科学革命	講義内容のまとめと文献の読解
第 5 回 還元不可能な事実	講義内容のまとめと文献の読解
第 6 回 科学的精神	講義内容のまとめと文献の読解
第 7 回 古代ギリシアの精神性	講義内容のまとめと文献の読解
第 8 回 中世ヨーロッパの世界観	講義内容のまとめと文献の読解
第 9 回 近代の古典的な物理学	講義内容のまとめと文献の読解
第 10 回 観察の近代的意義	講義内容のまとめと文献の読解
第 11 回 合理性	講義内容のまとめと文献の読解
第 12 回 秩序と法則	講義内容のまとめと文献の読解
第 13 回 文系的知識の特性	講義内容のまとめと文献の読解
第 14 回 理系的知識の特性	講義内容のまとめと文献の読解
第 15 回 文系的知識と理系的知識の融合	講義内容のまとめと文献の読解

授業の進捗状況によっては、計画にずれの生じる場合がある。その都度、教室のなかで確認する。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

- 小レポート 30%
 指定した文献を読解できているか。
 小テスト 30%
 授業の内容を把握できているか。
 出席 10%
 授業に積極的に参画できているか。
 期末レポート試験 30%

立論を論理的に組み立てられているか。

【小レポート】授業の内容に関する英語文献を事前に提示するので、その翻訳を小レポートとして課す。

【小テスト】授業のなかで英語文献の内容を解説するので、各自の翻訳を踏まえながら、授業の内容をまとめる。

【出席】授業に出席し、討論に参加する。

【期末レポート試験】授業の内容のなかから論題を随意に選んで、それについて自由に考察を展開する。

<テキスト/Textbook >

授業のなかで、その都度、指定する。

<参考文献/Reference Book >

授業のなかで、適宜、紹介する。

<備考/Remarks >

基本的には授業を対面で行なう。e-class を通じて課題を提示するので、e-class 上で課題に取りくむ。受講生の連絡には電子メールと e-class のメッセージ機能を活用する。

35620613

○科学と良心（「次の環境」を考えるために）

2 単位/Unit 春学期/Spring 京田辺/Kyotanabe 講義/Lecture

Science and Conscience (To Consider the "Next Environment")

小原 克博 後藤 琢也 石川 正道 廣安 知之
和田 喜彦 櫻井 芳雄

<概要/Course Content Summary >

本科目はアドバンスト・リベラルアーツ科目群の基礎科目となる。アドバンスト・リベラルアーツが目指しているものを明らかにすると共に、同志社の教育研究の原点である「良心」の視点から、自然科学および人文社会科学を超えて現代科学の課題を抽出し、その課題をめぐって議論を深めていく。

リベラルアーツ (Liberal Arts) は古代ギリシアの自由七科 (文法学・修辞学・論理学・代数学・幾何学・天文学・音楽) に起源をもっており、自由人が身につけるべき教養と考えられた。13 世紀中世ヨーロッパにおいて大学が成立した際には、リベラルアーツの習得が専門学部 (神学・法学・医学) に進むための前提とされた。その後、リベラルアーツは時代と共に変化してきたが、同志社の設立者・新島襄は米国のリベラルアーツ・カレッジを代表するアーモスト大学で学び、リベラルアーツの精神は新島の教育理念「自由教育」に大きな影響を与えている。

本科目は、こうしたリベラルアーツの歴史を踏まえつつ、それを現代の課題を担うものとしてアップグレードすることを目指しており、その意味で「アドバンスト・リベラルアーツ科目群」の導入としての役割を果たしている。こうした新しい教育思想のもと、本科目では、近現代において科学が直面してきた諸問題を、テキスト (『良心から科学を考える』) を用いながら「良心」の視点を交え、体系的に学ぶ。

現代世界が直面している喫緊の課題の一つは環境問題である。しかし、それは技術的な手法によってのみ解決するものではない。「環境」を自然科学が対象とする「自然環境」に限定せず、「社会環境」(法制度など) や「文化的環境」(宗教や倫理など) をも包含し、統合的に理解することによって「次の環境」に対する洞察を得ることができる。そのようなチャレンジングな課題に、本科目は取り組むことになる。

この授業はブレンドッド・ラーニングとして実施される。この授業は、教室での対面授業 1 回、オンデマンド授業 7 回、双方向オンライン授業 7 回によって構成されている。下記「授業計画」において各オンデマンド授業に付されている日付は課題提出の締め切り日を示している。都合のよい時間にオンデマンド動画で学習し、各回で示された課題を期日までに e-class (同志社大学のラーニング・マネージメント・システム) 上に提出する (各回とも土曜日 12:00 が締め切り)。

また、学びの成果を確認し、理解を深めるために双方向オンライン授業 (ディスカッションを中心としたアクティブラーニング) を行う。本科目では VR ゴーグル (Meta Quest 2) を使ったメタバース授業を行う。VR ゴーグルは授業期間中、貸し出しを行い、VR ゴーグルの設定や使用方法については初回の授業で説明する。

本科目は 1 週間に 2 回授業がある形となり、春学期の半分で授業が終了する。

<到達目標/Goals,Aims >

近現代において科学が直面してきた問題を良心の視点から総括し、「次の環境」を考えるための基礎的知識を学ぶこと、また、他者と議論することによって洞察を深め、自らの世界観を広げていくことを目標とする。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
1(04/11) (教室 1) 導入—アドバンスト・リベラルアーツとは何か。VR ゴーグルの使用説明 (担当者全員)	初回に学んだ内容を振り返り、自分自身の学習目的を明確にして下さい。
2(04/16) (オンデマンド 1) 科学と良心 (小原)	オンデマンド動画で指示された課題を期日までに eclass に提出してください。
3(04/18) (メタバース 1) アクティブラーニング (小原)	オンデマンド動画での学びを振り返り、疑問点を整理して授業に参加してください。
4(04/23) (オンデマンド 2) 環境問題と良心 (小原)	オンデマンド動画で指示された課題を期日までに eclass に提出してください。
5(04/25) (メタバース 2) アクティブラーニング (小原)	オンデマンド動画での学びを振り返り、疑問点を整理して授業に参加してください。
6(04/30) (オンデマンド 3) 資源エネルギー問題と良心 (後藤)	オンデマンド動画で指示された課題を期日までに eclass に提出してください。
7(05/09) (メタバース 3) アクティブラーニング (後藤)	オンデマンド動画での学びを振り返り、疑問点を整理して授業に参加してください。
8(05/14) (オンデマンド 4) フューチャーデザインと生活者の視点 (石川)	オンデマンド動画で指示された課題を期日までに eclass に提出してください。
9(05/16) (メタバース 4) アクティブラーニング (石川)	オンデマンド動画での学びを振り返り、疑問点を整理

10(05/21)	(オンデマンド5) AI・ICTと良心(廣安)	して授業に参加してください。 オンデマンド動画で指示された課題を期日までに eclassに提出してください。
11(05/23)	(メタバース5) アクティブラーニング(廣安)	オンデマンド動画での学びを振り返り、疑問点を整理 して授業に参加してください。
12(05/28)	(オンデマンド6) 公害事件の本質と良心(和田)	オンデマンド動画で指示された課題を期日までに eclassに提出してください。
13(05/30)	(メタバース6) アクティブラーニング(和田)	オンデマンド動画での学びを振り返り、疑問点を整理 して授業に参加してください。
14(06/04)	(オンデマンド7) 健康格差と良心(櫻井)	オンデマンド動画で指示された課題を期日までに eclassに提出してください。
15(06/06)	(メタバース7) 総括(担当者全員)	授業の全体を振り返り、得られた知見を整理してきて ください。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

オンデマンド授業での課題提出(各回5%×7回) 35%

課題において求められていることを的確に理解し、自分の意見をしっかりと表現してください。

双方向オンライン授業(メタバース授業)への出席(各回5%×7回) 35%

ディスカッションでの積極的な貢献を評価します。

期末レポート 30%

授業全体を通じて学んだことを総括するためのレポートを提出していただきます。

<テキスト/Textbook >

同志社大学 良心学研究センター編『良心から科学を考えるーパンデミック時代への視座ー』(岩波書店, 2021), リーディング・アサインメントとして使用します。早めに購入しておいてください。

<参考文献/Reference Book >

同志社大学 良心学研究センター編『良心学入門』(岩波書店, 2018), ISBN:9784000255783

<授業形態備考/Class type >

対面授業1回, オンデマンド授業7回, 双方向オンライン授業(メタバース授業)7回

35620614 △心理環境科学特論 2 単位/Unit 秋学期/Fall 京田辺/Kyotanabe 講義/Lecture
 Advanced Lectures in Psychological and Environmental Science
 板倉 昭二 内山 伊知郎 元山 純 櫻井 芳雄
 高橋 晋 加藤 正晴

<概要/Course Content Summary >

赤ちゃんの成長に典型的に見られる心の発達、人の成長・老化のプロセスについて、そのメカニズムと環境との係わりを知り、最新の脳科学研究の成果と照らし合わせながら、人を取り巻く環境との新たな接点を発見する。6人の教員が、発生、脳科学、発達科学の視点から、この目標を達成するためにリレー形式で講義する。

(板倉/4回) 初回は、本講義の概要、赤ちゃん学および生涯発達学の意味、発生や脳科学との関連の意味づけ、赤ちゃん研究法について概説する。最後の3回であるが、まず、乳幼児発達とそれを取り巻く環境との関係について、これまでにわかっている事実を紹介する。次に、向社会行動を含めた乳幼児の社会性の発達と環境との相互作用について論じる。最後に、工学的環境、特にロボットと乳幼児の融合について、Developmental Cybernetics の視点から解説する。

(元山/3回) はじめに生物であるヒトの中枢神経系の発生について、特にその過程における「遺伝情報と環境因子」の重要性について解説する。次に、脳の生後発達について、特に環境と中枢神経系との相互作用の重要性について解説する。最後に、成体の脳での神経新生と可塑性との関係について、環境因子と脳の活動や身体の活動との関連に着目して解説する。

(高橋/1回) 生得的な空間認知能力、環境の変化や老化に伴う空間認知の変化やその神経メカニズムを、特定の場所を通過した時に高頻度に活動する場所細胞や格子細胞に関する最新の成果と照らし合わせながら解説する。

(櫻井/3回) まず、社会的存在であるヒトにとって最も重要な環境である「他者と集団」の影響について解説する。次に、環境に敏感でハイリスクな段階とも言われている思春期・青年期における脳の変化について、統合失調症との関係も含め解説する。最後に、環境を認知するうえで重要な機能である視覚を取り上げ、その脳内メカニズムと可塑性について解説する。

(加藤/1回) 人の聴覚の発達について、受容器や神経系の仕組み、最小可聴閾の概念を解説する。より複雑な聴覚の働きである音源定位、音脈分凝、騒音下での聴取について解説し、特に発達過程における音環境の重要性について議論する。

(内山/3回) ここでは、とくに乳児期や高齢期に焦点を当て、発達における環境の役割について解説する。そして、家族集団における環境の働きを考察する。

<到達目標/Goals,Aims >

人間の心理と環境の関係を、発生、脳科学、発達科学等の科学的視点から包括的に理解できるようになる。具体的には、心理環境科学に関する基本的な知識を身につけることができるようになる、また新しい環境にさらされた人間とその心理の変容の関係を、論理的に解き明かす方法を考えることができるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
1 人間の心理と環境、そして赤ちゃん学 (板倉)	紹介した文献を含めた予習と復習
2 胎児期の脳の発生；遺伝因子と環境因子 (元山)	紹介した文献を含めた予習と復習
3 生後の脳の発達；環境因子と脳の発達 (元山)	紹介した文献を含めた予習と復習
4 成体の脳の変化；脳における神経新生と可塑性の関係 (元山)	紹介した文献を含めた予習と復習
5 空間認知の環境や発達加齢による変化 (高橋)	紹介した文献を含めた予習と復習
6 環境としての他者と集団 (櫻井)	紹介した文献を含めた予習と復習
7 思春期・青年期の脳の変化 (櫻井)	紹介した文献を含めた予習と復習
8 視覚による環境認知と脳の可塑性 (櫻井)	紹介した文献を含めた予習と復習
9 人の聴覚の発達 (加藤)	紹介した文献を含めた予習と復習
10 乳児発達の確率論的漸成説と環境 (内山)	紹介した文献を含めた予習と復習
11 高齢期の心理発達と環境 (内山)	紹介した文献を含めた予習と復習
12 家族と住居環境 (内山)	紹介した文献を含めた予習と復習
13 乳幼児の発達と環境特性 (板倉)	紹介した文献を含めた予習と復習
14 乳幼児の社会性の発達と環境 (板倉)	紹介した文献を含めた予習と復習
15 乳幼児とロボット (板倉)	紹介した文献を含めた予習と復習

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 80%

講義に対する取り組みの姿勢を総合的に評価する。

提出物 20%

各自の理解度を必要に応じて評価する。

講義に対する取り組みの姿勢, および基礎的事項の理解度等を総合的に評価する。

<参考文献/Reference Book >

必要に応じて, 適宜担当講師が指示する。

<備考/Remarks >

本講義は原則対面で実施するが, 状況に応じて変更の可能性がある。随時講義中に指示する。

35620615 △セルフアウェアネス（コーチング入門）

2 単位/Unit 秋学期/Fall 京田辺/Kyotanabe 演習/Seminar

Self Awareness (Introduction to Coaching)

廣安 知之 赤木 広紀

<概要/Course Content Summary >

コミュニティの形成には、ヒトとヒトのコミュニケーションが肝要である。いかにヒトに対峙しいかにヒトと協働するかは、今後ますます技術が進歩する中で重要な事項である。そのためには、他人の意見や気持ちを傾聴することも重要であるが、まず自分自身の意見や気持ちを理解する技術が必須である。これは、「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」というキリスト教主義にもつながる。「セルフアウェアネス」とは文字通り自己に意識を傾けることである。本講では、コーチングを通じて、自分自身を知る技術を身につける。なお、本講義では、企業においてコーチングを現在行っている教員が、実技を交えながら解説する。

<到達目標/Goals,Aims >

【知識】 コーチングとセルフアウェアネスについての知識を学び、それらの知識を元に自分自身を深く知るためのアプローチを学ぶ。【技能】 コーチングとセルフアウェアネスを実行する技術を身につける。【態度】 演習を通じて、実際のコーチングとセルフアウェアネスを体験する。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
1 オリエンテーション（セルフアウェアネスとコーチングについての概要）	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
2 コーチングスキルの基本（傾聴と反映）	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
3 価値観について・フィードバックの基本	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
4 ジョハリの窓（内的自己認識と外的自己認識を拡大する）	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
5 強みについて	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
6 興味関心について	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
7 願いについて	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
8 リソースとは	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
9 実習「社会と自分との関係」	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
10 実習「研究と自分との関係」	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
11 成功循環モデルについて	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
12 質問について（質問の種類）	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
13 KBPT 法（効果的な振り返りの手法）を使っの演習	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
14 パターンとは	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）
15 習慣化について・まとめ	4 時間（復習 2 時間， 予習 2 時間）

学生の進捗に合わせて授業計画の変更あり。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点（出席，議論への参加） 30%

授業内評価 35%

担当箇所発表および議論など

提出物 35%

レポートなど

<テキスト/Textbook >

参考資料を電子ファイルとして毎回，配布する。

<備考/Remarks >

担当教員の連絡先，連絡方法については，初回の授業で説明を行う。

担当教員との連絡方法が不明な場合には 高等研究教育院事務室を通じて連絡をとること。

本授業は，変則的な開講時間を設置する予定である。開講日時を登録前に高等研究教育院事務室に確認し，参加可能な場合に登録すること。

本授業は，双方向オンライン（リアルタイム型）を予定している。

そのため，受講できるように場所および設備の確保が必要である。特に，自身の PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。目安として，30Mbps 以上の通信速度，通信量制限が月 50GB 以上が望ましい。

本授業は，学生同士がペア，もしくはグループでの演習がカリキュラムに含まれる。

演習を効果的なものにするためには，相手に対する敬意をもって接すること（相互尊重）と，自分自身についてオープンでいること（自己開示）が一人一人に求められる。

相互尊重と自己開示が，この授業における到達目標を達成するために必要な姿勢であることを理解して，受講すること。

※定員を 12 名に設定する。Comm 5.0 副専攻プログラムの科目であるため，Comm 5.0 の履修生を優先するものとし，定員を超過した場合は，Comm 5.0 履修生以外の登録を機械的に抽選する。科目登録の変更が必要になった学生には，高等研究教育院事務室から連絡し，登録の変更を行う。

<概要/Course Content Summary >

本講義では、脳機能データのような時系列データの処理を念頭に、Python によるプログラミングの基礎を学ぶ。講義では、座学だけでなく、演習も含む。

<到達目標/Goals,Aims >

時系列データを対象としたデータ処理の基礎を、Python によって行えるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
1 インTRODakシヨン	Programming(4 時間)
2 プログラミングの復習 1	review and report(4 時間)
3 プログラミングの復習 2	review and report(4 時間)
4 Pandas・numpy 1	review and report(4 時間)
5 Pandas・numpy 2	review and report(4 時間)
6 Pandas・numpy 3	review and report(4 時間)
7 ファイルの取り扱い	review and report(4 時間)
8 描画 1	review and report(4 時間)
9 描画 2	review and report(4 時間)
10 アルゴリズム入門 1	review and report(4 時間)
11 アルゴリズム入門 2	review and report(4 時間)
12 アルゴリズム入門 3	review and report(4 時間)
13 時系列データ処理 1	review and report(4 時間)
14 時系列データ処理 2	review and report(4 時間)
15 まとめ	

学生の受講状況に合わせて内容を変更する可能性有り。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

授業の出席 10%

授業に参加し、積極的に発言する。内容を理解する。

宿題 30%

毎回、宿題が課される。宿題は実行するだけでなく、理解することが求められる。宿題が提出されたのち、理解が不十分な場合には、宿題が未提出と同等の判断を行う場合あり。

課題 60%

課題を行い評価される。提出の時間も考慮する。内容の理解も重要である。

クイズ形式で、理解度を確認し、クイズ結果の点数を適宜、返却する場合あり。場合によっては、個別に指導を行う。各回に出される宿題が一定以上のレベルで処理されていない場合には、単位取得不可の可能性あり。

<テキスト/Textbook >

配布資料を利用する。

<備考/Remarks >

生命医科学部医情報学科で身につけるべく基礎単語を知らない場合には受講不可。

学生自身のノートPCを用意すること。

Python 3.0 以上を用意すること。

関連のライブラリを自身でインストールできない場合には、受講不可。

対面および非対面授業を併用して実施する。非対面授業実施時には、PC をインターネットへの接続環境を整備すること。目

安として、30Mbps 以上の通信速度、通信量制限が月 50GB 以上が望ましい

生命医科学部医情報学科の学部科目である「プログラミングⅠ」および「プログラミングⅡ」の知識は必須。
同志社大学 e-learning system eclass に学生自身のノート P C からアクセスおよび利用ができない場合には受講不可。

本科目は、学部大学院連携科目である。学部生が「医療情報学」として受講する場合には、「プログラミングⅡ」を成績「B」以上を取得しておく必要がある。

担当教員の連絡先、連絡方法については、初回の授業で説明を行う。

担当教員との連絡方法が不明な場合には、生命医科学部事務室もしくは教務センターを通じて連絡をとること。

<概要/Course Content Summary >

本講義では、生体情報（例えば、近赤外脳機能計測法(fNIRS)）を対象とした、データ処理するアルゴリズムを学ぶ。講義では、座学だけでなく、Python によるデータ処理を学生自ら行う演習も含む。

<到達目標/Goals,Aims >

生体情報を対象とした、数種のアルゴリズムの基礎を学び、Python によるデータ処理が行えるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
1 インTRODクシヨン	Programming(4 時間)
2 Python プログラミング 復習とクラス	review and report(4 時間)
3 距離の定義	review and report(4 時間)
4 最適化 1	review and report(4 時間)
5 最適化 2	review and report(4 時間)
6 回帰 1	review and report(4 時間)
7 回帰 2	review and report(4 時間)
8 回帰 3	review and report(4 時間)
9 畳み込み	review and report(4 時間)
10 刺激の最適化	review and report(4 時間)
11 クラスタリング 1	review and report(4 時間)
12 クラスタリング 2	review and report(4 時間)
13 クラスタリング 3	review and report(4 時間)
14 学習・識別	review and report(4 時間)
15 まとめ	review and report(4 時間)

学生の理解と課題の進捗状況に合わせて、内容を変更する可能性あり。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

授業の出席 10%

授業に参加し、積極的に発言する。内容を理解する。宿題をすべて提出しても、授業に 7 割以上出席しなければ単位取得不可。

宿題 40%

毎回、宿題が課される。課題を行い評価される。宿題は実行するだけでなく、理解することが求められる。宿題が提出されたのち、理解が不十分な場合には、宿題が未提出と同等の判断を行う場合あり。

課題 50%

毎回、課題が課され、評価される。課題は実行するだけでなく、理解することが求められる。

課題が提出されたのち、理解が不十分な場合には、課題が未提出と同等の判断を行う場合あり。

すべての宿題や課題が提出されていても、出席が少ない場合には単位取得不可の可能性あり。

各回に出される宿題が一定以上のレベルで処理されていない場合には、単位取得不可の可能性あり。

課題の出題形式で、理解度を確認し、一部の結果の点数を適宜、返却する。場合によっては、個別に指導を行う。

<テキスト/Textbook >

適宜、資料を配布する。

<備考/Remarks >

本講義を受講するためには、医療情報学特論の単位取得が必要である。

本科目は、学部大学院連携科目である。学部生が「生体情報アルゴリズム学」として受講する場合には、「特論医療情報学」の単位取得が必要である。

学生自身のノートPCを用意すること。

Python 3.0 以上を用意すること。

関連のライブラリを自身でインストールできない場合には、受講不可。

同志社大学 e-learning system eclass に学生自身のノートPCからアクセスおよび利用ができない場合には受講不可。

対面授業と非対面授業（リアルタイム）を併用して実施する。準備すること。PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。目安として、30Mbps 以上の通信速度、通信量制限が月 50GB 以上が望ましい。

担当教員の連絡先、連絡方法については、初回の授業で説明を行う。

担当教員との連絡方法が不明な場合には、生命医科学部事務室もしくは教務センターを通じて連絡をとること。

35620624

○データベース基礎

2 単位/Unit 春学期/Spring 京田辺/Kyotanabe 講義および実技/Lecture and Skills practice
Basic Theory of Database

波多野 賢治

<概要/Course Content Summary >

記憶装置の大容量化により組織や個人が蓄積するデータ量は増大し続け、さらにインターネットの普及によりそのようなデータの配布が容易となっている。そのため、そうしたデータを格納しているデータベースシステムは、あらゆる組織の基幹業務や意思決定に必要な不可欠なものとなっている。

本講義では、大量のデータを効率よく管理し必要な情報を簡単かつ高速に検索するデータベース管理システムについて講述する。また、データベース理論に留まらずデータベースシステムの活用についても解説する。

<到達目標/Goals,Aims >

- ・論理演算、関係演算を習得できるようになる。
- ・データベース問合せ言語である SQL の基礎を習得できるようになる。
- ・データベース設計に重要となる正規化の概念を理解することができるようになる。
- ・実際にデータベースシステムを利用することができるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)		(授業時間外の学習/ Assignments)
1	オリエンテーション 本講義の講義内容の説明を行った後、データベースの考え方とその意義について概説する。	復習
2	命題論理学 関係データベースシステムを学ぶ上で必要となる基礎を概説する。	復習
3	述語論理学 関係データベースシステムを学ぶ上で必要となる基礎を概説する。	復習
4	集合論 関係データベースシステムを学ぶ上で必要となる基礎を概説する。	復習
5	振り返り (論理学および集合論)	予習、復習
6	データベースの基礎、データモデル 関係データモデルについて概説する。	復習
7, 8	データ操作言語 SQL 関係データベースシステムで利用されているデータ操作言語とその実装である SQL について概説する。	復習
9	正規化理論 関係データベース設計に欠かすことができないデータベースの正規化について概説する。	復習
10	トランザクション データベースシステムの重要機能の一つであるトランザクションの機能について概説する。	復習
11	振り返り (関係データベース)	予習、復習
12~15	SQLite/Python を利用したデータベースの作成・活用 実際に PC を用いてデータベースシステムの設計・構築・活用を演習内で行う。	復習

本講義はデータベースシステムの話をする前に、前半約 1/3 でその基礎となる集合論の内容に触れる。その後中盤で関係データベースシステムの基礎的事項を学習し、後半約 1/3 は PC を用いたデータベース実習を行う。

講義の進度や受講者の理解度によって上記授業計画を小規模に変更する場合がある。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点 (小レポート) 30%

講義内容の理解度を確認する。

振り返り課題 40%

講義内容の理解度を確認する。

期末レポート 30%

データベースシステムの設計・構築能力を確認する。

二度の振り返りの受験および最終レポートの提出を行わなかった場合は、本講義の単位取得は不可能とする。また、受講にお

ける不適切な行為、例えば、提出物である各課題を他者と共有し、盗用・剽窃等を行ったことが判明した場合は、不正行為として認定する。さらに、課された小レポートの提出率や出来が著しく低い場合は、どのような理由があるにせよ不合格とする場合がある。

<参考文献/Reference Book >

増永 良文『リレーショナルデータベース入門—データモデル・SQL・管理システム・NoSQL—』第3版（サイエンス社、2017）、ISBN:978-4781913902

吉川 正俊『データベースの基礎』（オーム社、2019）、ISBN:978-4274223730

<参照 URL/URL >

<https://sqlitebrowser.org/> The Official home of the DB Browser for SQLite（演習で使用するデータベースシステム SQLite のフロントエンド）

<授業形態備考/Class type >

対面授業に参加することに大きなリスクを伴う場合は、履修登録前に申し出る必要がある。また、社会の情勢や大学の方針に変更があった場合は、それにしたがって授業形態を変更する場合がある。

<備考/Remarks >

本講義内容を十分に理解するためには、数理論理学や離散数学に関する基本知識をあらかじめ有していることが望ましい。

<概要/Course Content Summary >

数理統計学および多変量解析の基礎を踏まえ、各種統計解析法を統計モデルとして位置づけ、統計モデルの考え方や各解析法の本質を理解する。基本的な統計解析法として取り上げるのは、重回帰分析、分散分析、ロジスティック回帰、ポアソン回帰、対数線形モデル、生存時間分析などである。これらの解析法の適用のための条件を正確に理解し、目的や状況に応じた適切な統計解析法の適用について学ぶ。

<到達目標/Goals,Aims >

- ①統計モデルの考え方や各解析法の本質を理解する。
- ②解析目標に合わせて、適切は解析法を選択することができる。
- ③統計ソフトを用いて、統計解析法を用いたデータの解析ができる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/ Assignments)
1 統計モデル (モデルの当てはめ, 定式化, パラメータ推定, 比較)	講義の復習
2 線形モデル 1 (重回帰分析)	講義の復習
3 線形モデル 2 (分散分析)	講義の復習
4 線形モデル 3 (共分散分析)	講義の復習
5 指数型分布族と一般化線形モデル (指数型分布族の性質, 連結関数)	講義の復習
6 一般化線形モデルにおける推測 (スコア統計量, 逸脱度など)	講義の復習
7 ロジスティック回帰 1 (2項ロジスティック回帰)	講義の復習
8 ロジスティック回帰 2 (多項ロジスティック回帰, 順序ロジスティック回帰)	講義の復習
9 プロビット回帰	講義の復習
10 分割表のモデル (ポアソンモデル, 多項モデル, 積多項モデル)	講義の復習
11 対数線形モデル	講義の復習
12 生存時間分析 1 (ノンパラメトリックモデル)	講義の復習
13 生存時間分析 2 (パラメトリックモデル)	講義の復習
14 生存時間分析 3 (セミパラメトリックモデル)	講義の復習
15 まとめと総括	最終レポート作成

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点 (出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 20%

出席および講義中の質疑応答

提出物 (講義レポート, 最終レポート) 80%

分析方法の適格性, 解釈の妥当性

レポートにおけるデータの取得, 分析, 結果の解釈の妥当性により判断する。

<テキスト/Textbook >

Annette, J.D.著 (田中 他訳) 『一般化線形モデル入門 (原著第2版)』 (共立出版, 2008)

<参考文献/Reference Book >

宿久・村上・原『確率と統計の基礎 I (増補改訂版)』 (ミネルヴァ書房, 2009), ISBN:978-4-623-05427-5

<備考/Remarks >

なお, 本講義は原則対面で実施するが, 状況に応じて変更の可能性はある。随時講義中に指示をする。

<概要/Course Content Summary >

本講義では、ベイズ統計学を理論、計算、応用の3つ側面から学習する。まずはすべての議論の基礎となる共役事前分布のベイズモデルの推測手法の理論を学習する。その後に、事後分布からのサンプリング法であるマルコフ連鎖モンテカルロ法の理論・実装法について学習する。さらに、さまざまなデータ分析例の紹介や、ベイジアンネットワーク、変分ベイズ法、ノンパラメトリックベイズ法、ベイズ最適化などの近年の話題についてのサーベイも行う。

<到達目標/Goals,Aims >

- ・ベイズ法の現代の統計科学における役割を理解する。
- ・ベイズモデルを用いた分析を正しく理解できるようになる。
- ・MCMC 法などのサンプリング手法を用いて、自らもベイズモデルを用いた分析を行うことができるようになる。
- ・ベイズ分野の最先端を理解する。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)

(授業時間外の学習/Assignments)

Week)

1	機械学習とベイズ学習 (1)	講義の復習
2	機械学習とベイズ学習 (2)	講義の復習
3	基本的な確率分布	講義の復習
4	ベイズ推論による学習と予測 (1) 共役事前分布・ベータ二項・ディリクレ多項モデル	講義の復習
5	ベイズ推論による学習と予測 (2) ポアソンモデル・1次元正規分布モデル	講義の復習
6	ベイズ推論による学習と予測 (3) 多次元正規分布モデル	講義の復習
7	ベイズ推論による学習と予測 (4) 線形回帰モデル	講義の復習
8	混合モデルと近似推論 (1) 混合モデル・ギブスサンプリング・変分推論	講義の復習
9	混合モデルと近似推論 (2) ポアソン混合モデルにおける推論	講義の復習
10	混合モデルと近似推論 (3) 崩壊型ギブスサンプリング・ELBO	講義の復習
11	応用モデルの構築と推論 (1) 線形次元縮約	講義の復習
12	応用モデルの構築と推論 (2) 線形次元縮約・非負値行列因子分解	講義の復習
13	応用モデルの構築と推論 (3) トピックモデル	講義の復習
14	応用モデルの構築と推論 (4) ニューラルネットワーク	講義の復習
15	応用モデルの構築と推論 (5) テンソル分解	最終レポートの作成

受講者の理解度に応じて、スケジュールを変更することがある。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点 (出席, クラス参加) 60%

受講態度で評価する。

レポート課題 40%

講義の理解度とレポートのまとめ方で評価をする。

<テキスト/Textbook >

須山敦志『ベイズ推論による機械学習』1（講談社，2017），ISBN:978-4-06-153832-0

<参考文献/Reference Book >

古澄英男，ベイズ計算機統計学，1.(朝倉書店，2015). ISBN:978-4-254-12856-7
その他の参考文献は講義内で適宜指示する。

<授業形態備考/Class type >

この講義はネット配信形式で行う。本来の講義日中に講義資料にアクセスをすることで講義出席とみなす。

<備考/Remarks >

講義資料，動画アクセス先に関する情報は，e-class で連絡を行う。

35620631 ○ヒト脳機能計測実験Ⅰ
2 単位/Unit 春集中/Spring Intensive 京田辺/Kyotanabe 実験/Experiment
Measurement and Experiment for Human Cerebral Functions I

廣安 知之 日和 悟

<概要/Course Content Summary >

データ処理から知見を得るためには闇雲にデータ収集を行えばよいのではなく、対象となるデータの特性を把握し、データ収集のための計画を綿密にたて、十分な知識を基盤としてデータ処理を適切に行う必要がある。本講義では、ヒトの脳機能データを対象に、データの性質、取得方法、実験計画、データ処理、データの解釈を学ぶ。特に本講義では、すでに論文発表されている先行研究を調査し、その追試（replication study）を通じて前述の手続きと考え方を身につける。

<到達目標/Goals,Aims >

【知識】ヒトの脳機能データの特性および、データ処理に関する知識を獲得する。【技能】ヒトの脳機能データをどのように計測し、実際にどのようなデータ処理を行うのかの技術を獲得する。【態度】得られた結果から、どのような知見が得られるかの考察が可能となる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
第 1 回 仮説設定： 認知神経科学では、仮説検証型の研究アプローチがとられることが多い。ここでは、先行研究をいくつかの例に挙げながらその概要を説明し、仮説の設定について学習する。	4 時間（事前に指定した書籍・文献を熟読し、予習する）
第 2 回 文献調査： 第 1 回で説明した仮説検証型アプローチをとっている先行研究を、PubMed 登録文献からいくつか抽出し、各研究の仮説、実験/対照条件、サンプルサイズ、計測モダリティ、行動データ、主観評価法などの項目がどのような狙いで設定されているかを比較し、実験デザインの理解を深める。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 3 回 実験環境構築 その 1： 調査した先行研究の中から 1 つのテーマを追試対象として選択し、実験の準備を行う。具体的には、計測器、刺激提示装置/ソフトウェア、行動データ計測のための装置/ソフトウェアなどを準備する。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 4 回 実験環境構築 その 2： 前回から継続して、環境構築を進める。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 5 回 実験環境構築 その 3： 前回から継続して、環境構築を進める。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 6 回 計測 その 1： 前回までに構築した実験環境を用いて、実際に被験者を計測する。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 7 回 計測 その 2： 継続して、実験を行う。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 8 回 計測 その 3： 継続して、実験を行う。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 9 回 分析 その 1： 実験で得られたデータの処理を行い、仮説検定を行う。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 10 回 分析 その 2： 継続して、分析を実施する。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 11 回 分析 その 3： 継続して、分析を実施する。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 12 回 議論 その 1： 分析結果に対して、解釈を行う。追試研究のため、結果が再現されたか・なぜされなかったのかを着眼点とし、必要に応じて類似研究の調査を行いつつ、結論づける。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 13 回 議論 その 2： 継続して結果の解釈を進める。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 14 回 資料作成： 一連の実習をポスター形式でまとめ、発表の準備を行う。	4 時間（復習 2 時間、予習 2 時間）
第 15 回 発表会： 各人の実習結果を発表し、議論する。仮説検証型の利点・欠点について、各人の実習を通じて得られた経験を元に議論し、理解を深める。	6 時間（各人の研究成果について、レポート形式でまとめて提出する）

学生の理解，課題の進捗に合わせて内容を変更する可能性あり。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

レポート 40%

先行研究調査，追試研究結果をそれぞれまとめたレポート・ポスター，その他指示された提出物を「手法の適切な使用」「独自性」「体裁」の観点で評価する。

議論への参加 20%

講義中に議論がなされた際の発言回数等に基づいて議論参加への積極性を評価する。

プレゼンテーション 40%

最終回のポスタープレゼンテーションについて，「手法の適切な使用」「独自性」「体裁」の観点で評価する。

<備考/Remarks >

PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。目安として，30Mbps 以上の通信速度，通信量制限が月 50GB 以上が望ましい。

35620632

△ヒト脳機能計測実験 II

2 単位/Unit 秋集中/Fall Intensive 京田辺/Kyotanabe 実験/Experiment
Measurement and Experiment for Human Cerebral Functions II

廣安 知之 日和 悟

<概要/Course Content Summary >

データ処理から知見を得るためには闇雲にデータ収集を行えばよいのではなく、対象となるデータの特性を把握し、データ収集のための計画を綿密にたて、十分な知識を基盤としてデータ処理を適切に行う必要がある。本講義では、ヒトの脳機能データを対象に、データの性質、取得方法、実験計画、データ処理、データの解釈を学ぶ。ここでは、ヒト脳機能計測実験 I の内容を発展させ、各自の研究課題あるいは新たな課題に対してその方法を適用し、実践的な知識と技術を獲得する。

<到達目標/Goals,Aims >

【知識】ヒトの脳機能データの特性および、データ処理に関する知識を獲得する。【技能】ヒトの脳機能データをどのように計測し、実際にどのようなデータ処理を行うのかの技術を獲得する。【態度】得られた結果から、どのような知見が得られるかの考察が可能となる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
第 1 回 仮説駆動型とデータ駆動型： ヒト脳機能計測実験 I で扱った仮説駆動(検証)型の研究アプローチ以外にも、事前の仮説設定なしにデータの特徴から傾向や仮説・モデルを見出すデータ駆動型アプローチが存在する。それぞれの先行研究の例を挙げながら、その違いや特徴について理解を深める。	4 時間 (事前に指定した書籍・文献を熟読し、予習する)
第 2 回 文献調査： 自身が進めている研究、あるいは自身が興味を持っている研究トピックについて本講義内で実験・解析を行うことを想定して、類似研究を調査する。また、仮説駆動型とデータ駆動型のいずれの方法論を取るのかも検討する。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 3 回 実験デザイン： 調査結果を元に、自身の実習課題のための実験デザインを行う。特にデータ駆動型アプローチを取る場合には、どのような解析法を取るのか、どのような指標で結果を評価するのかについて検討する。また、そのためのヒントとなるいくつかの代表的な解析手法を紹介する。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 4 回 実験環境構築 その 1： 実験の準備を行う。具体的には、計測器、刺激提示装置/ソフトウェア、行動データ計測のための装置/ソフトウェアなどを準備する。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 5 回 実験環境構築 その 2： 前回から継続して、環境構築を進める。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 6 回 計測 その 1： 前回までに構築した実験環境を用いて、実際に被験者を計測する。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 7 回 計測 その 2： 継続して、実験を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 8 回 計測 その 3： 継続して、実験を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 9 回 分析 その 1： 実験で得られたデータの処理を行い、仮説検定を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 10 回 分析 その 2： 継続して、分析を実施する。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 11 回 分析 その 3： 継続して、分析を実施する。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 12 回 議論 その 1： 分析結果に対して、解釈を行う。必要に応じて類似研究の調査を行いつつ、当初想定した結果が得られたのか、新たな知見が得られたのかについて結論づける。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 13 回 議論 その 2： 継続して結果の解釈を進める。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第 14 回 資料作成： 一連の実習をポスター形式でまとめ、発表の準備を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)

第 15 回 発表会： 各人の実習結果を発表し，議論する。

6 時間（各人の研究成果について，レポート形式でまとめて提出する）

学生の理解，課題の進捗に合わせて内容を変更する可能性あり。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

レポート 40%

先行研究調査，追試研究結果をそれぞれまとめたレポート・ポスター，その他指示された提出物を「手法の適切な使用」「独自性」「体裁」の観点で評価する。

議論への参加 20%

講義中に議論がなされた際の発言回数等に基づいて議論参加への積極性を評価する。

プレゼンテーション 40%

最終回のポスタープレゼンテーションについて，「手法の適切な使用」「独自性」「体裁」の観点で評価する。

<備考/Remarks >

PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。目安として，30Mbps 以上の通信速度，通信量制限が月 50GB 以上が望ましい。

35620633

○動物行動神経計測実験 I

2 単位/Unit 春集中/Spring Intensive 京田辺/Kyotanabe 実験/Experiment

Measurement and Experiment for Animal Behavioral Nerves I

飛龍 志津子 小林 耕太

<概要/Course Content Summary >

本講義では「コミュニティー 5.0」を構想し実装する上で必須となる、ヒトを含めた動物を理解するための知識・技能を中心に学習する。ヒトも動物の一種であり、ヒトのもつ本能、情動、生理的な応答などの動物的な側面を考慮することではじめて、次世代の社会・技術を構想することが可能になる。本講義では動物の知覚・認知・行動を支配するアルゴリズムを計測し解明するため必要となる、生理指標および行動データを記録する技術を学ぶとともに、それらのデータを解析する手法の獲得を目指す。

<到達目標/Goals,Aims >

①動物の行動および生理学反応を正確に計測・定量化できる。

生体信号を電気信号に変換する計測機器の仕組みおよび取り扱いに習熟する。実地を通し、計測機器の作成、計測機器の設定・接続、計測機器の性能評価などをできるようになる。

②行動および生理学データを正しく解析できる。

実験データの多くは多次元信号である。それらを取り扱うための知識および、PC 等を用いた解析技術を取得する。また複数の実験条件間におけるデータの違いを正しく理解・記述できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
1 はじめに (授業内容の概論)	復習 (4 時間)
2 動物行動データの基礎 1	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
3 動物行動データの基礎 2	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
4 動物行動データの応用計測 1	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
5 動物行動データの応用計測 2	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
6 動物行動データの応用計測 3	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
7 動物生理データの基礎 1	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
8 動物生理データの基礎 2	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
9 動物生理データの応用計測 1	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
10 動物生理データの応用計測 2	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
11 動物生理データの応用計測 3	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
12 動物行動・生理データ解析 1	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
13 動物行動・生理データ解析 2	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
14 動物行動・生理データ解析 3	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
15 総合統括	復習 (4 時間)

講義の順番および詳細な時間の配分については受講者との相談のうえ調整する場合がある。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 20%

出席は必須である

小レポート 30%

必要に応じてレポートの提出を求める

授業内評価 50%

論文紹介, 研究発表, 議論・討論の内容を評価する

上記は例示であり, 受講者との相談により変更する場合がある。

<備考/Remarks >

対面授業と非対面授業 (リアルタイム, オンデマンド) を併用して実施する。準備すること。PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。

35620634

△動物行動神経計測実験Ⅱ

2 単位/Unit 秋集中/Fall Intensive 京田辺/Kyotanabe 実験/Experiment

Measurement and Experiment for Animal Behavioral Nerves Ⅱ

飛龍 志津子 小林 耕太

<概要/Course Content Summary >

本講義では「コミュニティー 5.0」を構想し実装する上で必須となる、ヒトを含めた動物を理解するための知識・技能を中心に学習する。ヒトも動物の一種であり、ヒトのもつ本能、情動、生理的な応答などの動物的な側面を考慮することではじめて、次世代の社会・技術を構想することが可能になる。本講義では生体データの性質を体系的に解釈し説明する手法、態度を学ぶとともに、それらのデータに基づいた新たな技術・医療・理学的発見につながる研究計画を構想できるようになる。

<到達目標/Goals,Aims >

①生体データの性質を体系的に解釈し説明できる。

生体现象の裏に潜む物理事象に着目し、要因間の因果性を中心として、実験変数や結果を解釈・説明できるようになる。

②行動および生理学データに基づいた未来を構想できる。

受講者が記録・解析した生体データに関連して、過去の適切な研究事例を調査するとともに、既存の技術や医療あるいは理学的な知見を進展させる手法を考案できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)

(授業時間外の学習/Assignments)

Week)

1	はじめに (授業内容の概論)	復習 (4 時間)
2	動物行動・生理データ研究の基礎 1	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
3	動物行動・生理データ研究の基礎 2	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
4	動物行動・生理データ研究の基礎 3	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
5	動物行動・生理データ研究の最先端 1	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
6	動物行動・生理データ研究の最先端 2	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
7	動物行動・生理データ研究の最先端 3	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
8	動物行動・生理データ研究の最先端 4	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
9	動物行動・生理データ研究の最先端 5	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
10	動物行動・生理データ研究の発表および討議 1 (学生が取得したデータを中心におこなう)	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
11	動物行動・生理データ研究の発表および討議 2 (学生が取得したデータを中心におこなう)	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
12	動物行動・生理データ研究の発表および討議 3 (学生が取得したデータを中心におこなう)	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
13	動物行動・生理データ研究の発表および討議 4 (学生が取得したデータを中心におこなう)	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
14	動物行動・生理データ研究の発表および討議 5 (学生が取得したデータを中心におこなう)	関連する資料・講義内容等の予習(2 時間) および復習 (2 時間)
15	総合統括	復習 (4 時間)

講義の順番および詳細な時間の配分については受講者との相談のうえ調整する場合がある。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 20%

出席は必須である

小レポート 30%

必要に応じてレポートの提出を求める

授業内評価 50%

論文紹介，研究発表，議論・討論の内容を評価する

上記は例示であり，受講者との相談により変更する場合がある。

<備考/Remarks >

対面授業と非対面授業（リアルタイム，オンデマンド）を併用して実施する。準備すること。PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。

35620635

○生体化学情報計測実験Ⅰ

2 単位/Unit 春集中/Spring Intensive 京田辺/Kyotanabe 実験/Experiment

Measurement and Experiment for Biological and Chemical informations I

太田 哲男 大江 洋平

<概要/Course Content Summary >

生体情報には大きく分けて電気的情報と化学的情報があり、それらを知ることは生体の状態を知るために重要である。本講義では、後者の化学情報の抽出・解析手法について実践的に学び、ヒトの健康・長寿に資することを目的とし、それらの生体情報の利用について検討する。具体的には、複雑な生体サンプルから目的とする化学情報を得るためのプローブ分子の設計・合成およびその利用に関する実験や質量分析による呼気成分分析実験に関するデータを題材として、分析化学や有機合成化学、生化学等の基礎知識と先行研究の例などを交え、評価・議論を行う。

<到達目標/Goals,Aims >

本講義では、複雑なヒト生体情報の合理的な分析方法の開発に向け、上記概要に示した授業内容を通じ、1) 標的の代謝物質のラベル化、2) 酵素活性測定、3) NMR による生体情報取得、4) GC-MS 分析による代謝物質解析に関する知識や技術を理解・習得することを到達目標とする。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
第1回 導入：化学分析と社会	復習（4時間）
第2回 化学分析概要1： 呈色反応・クロマトグラフィー	予習（有機化合物の呈色反応について：2時間）および復習（2時間）
第3回 化学分析概要2： 機器分析	予習（NMR, MS, UV-vis スペクトルについて：2時間）および復習（2時間）
第4回 化学分析実験1	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第5回 化学分析実験2	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第6回 機器分析実験1	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第7回 機器分析実験2	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第8回 機器分析実験3	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第9回 機器分析データ解析1	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第10回 機器分析データ解析2	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第11回 発表会1	予習（発表資料の作成：2時間）および復習（2時間）
第12回 生体化学情報計測実験1	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第13回 生体化学情報計測実験2	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第14回 生体化学情報計測実験3	予習（事前配布資料の熟読：2時間）および復習（2時間）
第15回 発表会2	予習（発表資料の作成：2時間）および復習（2時間）

到達目標の達成に向け、指導教員と相談の上、学習および実験実施計画をたてて進める。講義の順序や配分は学生の学習や実験の実施状況に合わせて変更することがあり得る。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 60%

学習や実験への取り組み姿勢

発表会 40%

発表会でのプレゼンテーションおよびディスカッション

平常点と発表会を合わせて総合的に評価し「合・否」を判定するため、上記の比率は変更することがある。

<備考/Remarks >

対面授業と非対面授業（リアルタイム、オンデマンド）を併用して実施する。準備すること。PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。

担当者との連絡は、e-mail を通して行う。

太田 tota[at]mail.doshisha.ac.jp

大江 yoe[at]mail.doshisha.ac.jp

35620636

△生体化学情報計測実験Ⅱ

2 単位/Unit 秋集中/Fall Intensive 京田辺/Kyotanabe 実験/Experiment

Measurement and Experiment for Biological and Chemical informations II

太田 哲男 大江 洋平

<概要/Course Content Summary >

生体情報には大きく分けて電気的情報と化学的情報があり、それらを知ることは生体の状態を知るために重要である。本講義では、後者の化学情報の抽出・解析手法について実践的に学び、ヒトの健康・長寿に資することを目的とし、それらの生体情報の利用について検討する。具体的には、最新の生体化学情報計測に関する論文を調査・理解したうえで、独自のアプローチでの生体化学情報計測実験を設計し、実際にデータの計測や解析を行う。それらを小規模のゼミで発表し、議論することによって理解を深める。最終的に、それらの成果をまとめ、発表・議論することにより、生体化学情報計測研究を実践的学ぶ。

<到達目標/Goals,Aims >

本講義では、複雑なヒト生体情報の合理的な分析方法の開発に向け、上記概要に示した授業内容を通じ、1) 標的の代謝物質のラベル化, 2) 酵素活性測定, 3) NMR による生体情報取得, 4) GC-MS 分析による代謝物質解析に関する知識や技術を理解・習得することを到達目標とする。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
第1回 導入：生命科学研究における分析化学の重要性	復習 (4時間)
第2回 化学分析概要1	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第3回 化学分析概要2	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第4回 研究調査1： 生体化学情報計測研究の最前線の研究を調査し、背景等を理解する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第5回 研究調査2： 生体化学情報計測研究の最前線の研究に関する調査結果をまとめ、発表し、議論する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第6回 テーマ設定1： 研究調査の結果を踏まえ、独自のアプローチを提案し、議論する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第7回 テーマ設定2： 先行研究調査の結果を踏まえ、独自のアプローチを提案し、議論し、研究テーマを設定する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第8回 生体化学情報計測研究1： テーマ設定に従って、実際にデータを採取し、解析する。また、小規模のゼミでそれらの発表し、議論する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第9回 生体化学情報計測研究2： テーマ設定に従って、実際にデータを採取し、解析する。また、小規模のゼミでそれらの発表し、議論する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第10回 生体化学情報計測研究3： テーマ設定に従って、実際にデータを採取し、解析する。また、小規模のゼミでそれらの発表し、議論する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第11回 生体化学情報計測研究4： テーマ設定に従って、実際にデータを採取し、解析する。また、小規模のゼミでそれらの発表し、議論する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第12回 生体化学情報計測研究5： テーマ設定に従って、実際にデータを採取し、解析する。また、小規模のゼミでそれらの発表し、議論する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第13回 生体化学情報計測研究6： テーマ設定に従って、実際にデータを採取し、解析する。また、小規模のゼミでそれらの発表し、議論する。	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)
第14回 生体化学情報計測研究7：	予習 (事前配布資料の熟読：2時間) および復習 (2時間)

テーマ設定に従って、実際にデータを採取し、解析する。また、小規模のゼミでそれらの発表し、議論する。
第15回 研究成果の発表と総括 予習（発表資料の作成：2時間）および復習（2時間）

到達目標の達成に向け、指導教員と相談の上、学習および実験実施計画をたてて進める。講義の順序や配分は学生の学習や実験の実施状況に合わせて変更することがあり得る。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 80%

学習や実験への取り組み姿勢

研究成果の発表と総括 20%

発表会でのプレゼンテーションおよびディスカッション等

学習や実験への取り組み姿勢, 発表会でのプレゼンテーションおよびディスカッション等から総合的に評価し「合・否」を判定するので, 上記の比率は変更することがありうる。

<備考/Remarks >

対面授業と非対面授業（リアルタイム, オンデマンド）を併用して実施する。準備すること。PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。

担当者との連絡は, e-mail を通して行う。

太田 tota[at]mail.doshisha.ac.jp

大江 yoe[at]mail.doshisha.ac.jp

<概要/Course Content Summary >

本講義では、実験、調査により得られるデータのみならず、各種センサーにより計測された多種多様なデータの解析法について学ぶ。これらのデータは単に量が膨大なだけでなく、時空間に関わる複雑な構造をもつものが多い。近年の計測技術やデータ運用技術の発展により、膨大かつ多様なデータが解析の対象となっている。また、データ量の増加に伴い、解析環境も従来のローカル計算機、リモート計算機によるものに加えて、クラウド上の計算機資源を使用することが一般的になってきている。このような状況を踏まえ、本講義では、実際の複雑データについて各種計算機資源を活用して解析するための方法について学ぶ。

<到達目標/Goals,Aims >

- ①大規模複雑なデータをハンドリングできる。
- ②画像音声などマルチメディアデータの解析ができる。
- ③時空間データの解析ができる。
- ④クラウド環境でのデータの解析ができる。

<授業計画/Schedule >

(実施回/Week)	(内容/Contents)
1～4	先行研究調査
5～8	データ収集・解析
9～12	既存手法評価, 新規手法開発
13～15	新規手法評価

最新論文のサーベイを行い、最新のデータ解析法に関わる知識を習得する。

既存の手法の利点欠点を踏まえ、新たな手法の開発を目指す。

その際、受講者は各自でテーマを設定し、それに対応してデータを収集取得する。既存手法を自身でインプリメントし、取得したデータに適応することにより、その特徴を把握する。この中で課題を発見し、その改善方法を検討する。共同での意見交換を行い、新たな方法の提案を目指す。新規手法については、シミュレーション、実データ解析を通して性能評価を行う。可能であれば、既存手法と際について、理論的に評価する。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

学会発表・論文投稿（準備含む） 100%

講義中およびその前後の取り組みを総合的に評価する。

特に、国内・国際会議発表、論文執筆（含む、その準備）について評価する。

<備考/Remarks >

なお、本講義は原則対面で開催するが、状況に応じて変更の可能性がある。随時講義中に指示をする。

35620642 △複雑データ解析 II 2 単位/Unit 秋学期/Fall 京田辺/Kyotanabe PBL/PBL
Analysis of Complicated Data II

宿久 洋

<概要/Course Content Summary >

本講義では、複雑データ解析 I で学んだ各種計算機資源を活用した複雑データ解析法について、その理論的な性質を理解し、課題に応じて適切に計算機環境や手法を選択する能力を身につける。さらに、そのような環境を前提とした新たなデータ解析法の開発について取り組む、加えて、実践的な課題解決を目的としたデータ解析に取り組む。

<到達目標/Goals,Aims >

- ①各種データ解析法の理論的性質を深く理解する。
- ②必要に応じて新たなデータ解析法を開発できる。
- ③データ解析を用いて実際の課題を解決できる。

<授業計画/Schedule >

(実施回/Week)	(内容/Contents)
1 ~ 4	先行研究調査
5 ~ 8	データ収集・解析
9 ~ 12	既存手法評価, 新規手法開発
13 ~ 15	新規手法評価

最新論文のサーベイを行い、最新のデータ解析法に関わる知識を習得する。

既存の手法の利点欠点を踏まえ、新たな手法の開発を目指す。

その際、受講者は各自でテーマを設定し、それに対応してデータを収集取得する。既存手法を自身でインプリメントし、取得したデータに適応することにより、その特徴を把握する。この中で課題を発見し、その改善方法を検討する。共同での意見交換を行い、新たな方法の提案を目指す。新規手法については、シミュレーション、実データ解析を通して性能評価を行う。可能であれば、既存手法と際について、理論的に評価する。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

学会発表・論文投稿（準備含む） 100%

講義中およびその前後の取り組みを総合的に評価する。

特に、国内・国際会議発表、論文執筆（含む、その準備）について評価する。

<備考/Remarks >

なお、本講義は原則対面で実施するが、状況に応じて変更の可能性はある。随時講義中に指示をする。

35620643

○質的データ解析 I

2 単位/Unit 春学期/Spring 京田辺/Kyotanabe 講義および実技/Lecture and Skills practice
Analysis of Qualitative Data I

鄭 躍軍

<概要/Course Content Summary >

人間の意識と行動の深みを理解するためには、数値に表せないデータ、また数値に表したとしても数字の間隔には意味がないデータ、いわゆる質的データの活用が不可欠である。本講義では、実験、観察、調査などにより収集されたカテゴリカル・データの解析法を講義する。具体的には、カテゴリカル・データからの情報抽出の基本的な考え方から、類型区分、関連性分析、因果分析などの高度な統計解析法までの理論的考え方と応用的技法を実際データ及び分析ツールを活用して学ばせる。

<到達目標/Goals,Aims >

- ①カテゴリカル・データの特徴及び生成方法が理解できるようになる。
- ②頻度と順序のもつ情報の抽出方法が習得できるようになる。
- ③質的変数間の関連性及び因果関係の解析方法が活用できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents) Week)		(授業時間外の学習/ Assignments)
1	オリエンテーション	
2	カテゴリカルデータの特徴	配布資料を復習する
3	カテゴリカルデータの分類と生成方法	配布資料を復習する
4	カテゴリカルデータ分析の基本原則	配布資料を復習する
5	情報抽出の考え方	配布資料を復習する
6	分析用ソフトの説明	配布資料を復習する
7	分析用ソフトの演習	配布資料を復習する
8	中間発表とディスカッション	
9	カテゴリカルデータ分析の実際：単純集計	配布資料を復習する
10	カテゴリカルデータ分析の実際：クロス表	配布資料を復習する
11	カテゴリカルデータ分析の実際：関連性分析	配布資料を復習する
12	カテゴリカルデータ分析の実際：対応分析	配布資料を復習する
13	カテゴリカルデータ分析の実際：ロジスティック回帰	配布資料を復習する
14	カテゴリカルデータ分析の実際：ポアソンモデル	配布資料を復習する
15	期末発表とディスカッション	

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

- 授業参加及び貢献 30%
授業態度、課題提出状況など
- 発表 30%
内容準備、発表効果など
- 期末レポート 40%
授業内容への理解程度など

<テキスト/Textbook >

毎回、担当者が作成する授業資料を配布する。

<参考文献/Reference Book >

藤井良宜『カテゴリカルデータ解析』B5（共立出版，2010），ISBN:978-4-320-01921-8
ほかの参考文献は授業時に指示する。

<備考/Remarks >

- ・本授業は対面で行うが、場合によって Teams による双方向オンラインへ変更する。詳細は随時連絡する。

35620644

△質的データ解析 II

2 単位/Unit 秋学期/Fall 京田辺/Kyotanabe 講義および実技/Lecture and Skills practice
Analysis of Qualitative Data II

鄭 躍軍

<概要/Course Content Summary >

質的研究にとって、最も深刻な課題の1つが非数値化データの分析と解釈であり、いわばインタビュー記録、画像、音声や動画ファイルなどのテキストデータを分析することが必要不可欠である。本講義では、質的データ解析 I のカテゴリカル・データ解析法を踏まえ、テキストデータを中心に、質的データ分析の基本原則、データベース化、分析方法、分析手順などを講述する。具体的には、内容分析、ナラティブ分析、談話分析、フレームワーク分析、グラウンデッド・セオリーなどの分析技法を解説しながら、コーディング、主題・類型・関係の特定、分析結果の要約などの主な分析手順について質的データ分析ソフトの活用を通して理解させる。

<到達目標/Goals,Aims >

- ①質的研究で扱うデータの特徴が徹底的に理解できるようになる。
- ②テキストデータの主な解析法の理論と応用が習得できるようになる。
- ③質的データ分析の手順及び専用ソフトの活用方法が掌握できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents) Week)		(授業時間外の学習/ Assignments)
1	オリエンテーション	
2	質的データの特徴	配布資料を復習する
3	テキストデータの分類と生成方法	配布資料を復習する
4	質的データ分析の基本原則	配布資料を復習する
5	資料の整理とコーディング	配布資料を復習する
6	質的データ分析用ソフトの説明	配布資料を復習する
7	質的データ分析用ソフトの演習	配布資料を復習する
8	中間発表とディスカッション	
9	質的データ分析の実際：資料のデータ化	配布資料を復習する
10	質的データ分析の実際：内容分析	配布資料を復習する
11	質的データ分析の実際：ナラティブ分析	配布資料を復習する
12	質的データ分析の実際：談話分析	配布資料を復習する
13	質的データ分析の実際：フレームワーク分析	配布資料を復習する
14	質的データ分析の実際：グラウンデッド・セオリーによる分析	配布資料を復習する
15	期末発表とディスカッション	

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

授業参加及び貢献 30%

授業態度、課題提出状況など

発表 30%

内容準備、発表効果など

期末レポート 40%

授業内容への理解程度など

<テキスト/Textbook >

毎回、担当者が作成する授業資料を配付する。

<参考文献/Reference Book >

佐藤 郁哉『質的データ分析法－原理・方法・実践－』B5（新曜社，2008），ISBN:978-4-7885-1095-1
ほかの参考文献は授業時に指示する。

<備考/Remarks >

- 本授業は対面で行う予定であるが、場合によって Teams による双方向オンラインへ変更する。
- 担当教員との連絡は e-mail や e-class にて行う。

<概要/Course Content Summary >

高度情報化社会である現代では、膨大な量のデータがさまざまな形式(マルチメディア)で存在している。人間はこうした各種データから情報を抽出し、それらを活用して新しい知識を得ることでさまざまな問題を解決していくことが一般的である。

本講義ではそうした一連の流れを、前半のⅠでは1)現状認識、2)問題本質の理解、3)解決法の提案を、後半のⅡでは4)問題解決法の計算機上での実装、5)実装結果の評価、そして6)新しい技術として発表、という形でプロセス化し、プロジェクトを遂行するために必要な知識を身につけさせる。

<到達目標/Goals,Aims >

- ・世の中の現状を正しく認識できるようになる。
- ・世の中に蔓延る問題の本質を把握できるようになる。
- ・問題解決のための方法を考案し、計算機を用いてその実現を図ることができるようになる。
- ・提案した方法の効果を正しく評価することができ、更なる問題の把握ができるようになる。
- ・提案した方法の意義や効果をわかりやすく説明できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
1～3 研究テーマ設定	情報収集
4～7 サーベイ	文献調査, サーベイ論文作成
8～11 現状の問題	情報収集, 文献調査
12～15 問題解決法の立案	研究調査, 計画書作成

受講者の研究進度によって授業計画を変更する場合がある。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

- 取組み姿勢** 35%
各回の進捗度合い
- サーベイ論文** 35%
論文の質
- 実施計画書** 30%
提案内容の質と計画書の出来

<テキスト/Textbook >

情報系関係書籍の他に、ACM、IEEE CS、情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、言語処理学会等、国内外各学会から発行されている論文誌、プロシーディングス、各出版社が発行している会議録などすべてがテキストとなり得る。研究テーマに応じて学会学生会員となり、それらの研究論文を参照できるようにしておくこと。

<参考文献/Reference Book >

Stack Overflow や Qiita といったインターネット上の技術情報共有サービスは、特に自身の研究を計算機上に実装する際に大いに役立つため、詳細に閲覧ができるようメンバ登録をしておくこと。

<参照 URL/URL >

- <https://www-mil.cis.doshisha.ac.jp/> メディア情報学研究室ホームページ
<https://stackoverflow.com/> Stack Overflow
<https://qiita.com/> Qiita

<授業形態備考/Class type >

本講義は基本的に対面で行うが、自身の健康等、大きなリスクを伴う場合は、履修登録前に申し出る必要がある。また、社会の情勢や大学の方針に変更があった場合は、それにしたがって授業形態を変更する場合がある。

<備考/Remarks >

文化情報学部が開設する学部開講科目のうち、自身の研究遂行に関連のある科目は必要に応じて履修すること。

<概要/Course Content Summary >

高度情報化社会である現代では、膨大な量のデータがさまざまな形式(マルチメディア)で存在している。人間はこうした各種データから情報を抽出し、それらを活用して新しい知識を得ることでさまざまな問題を解決していくことが一般的である。

本講義ではそうした一連の流れを、前半のⅠでは1)現状認識、2)問題本質の理解、3)解決法の提案を、後半のⅡでは4)問題解決法の計算機上での実装、5)実装結果の評価、そして6)新しい技術として発表、という形でプロセス化し、プロジェクトを遂行するために必要な知識を身につけさせる。

<到達目標/Goals,Aims >

- ・世の中の現状を正しく認識できるようになる。
- ・世の中に蔓延る問題の本質を把握できるようになる。
- ・問題解決のための方法を考案し、計算機を用いてその実現を図ることができるようになる。
- ・提案した方法の効果を正しく評価することができ、更なる問題の把握ができるようになる。
- ・提案した方法の意義や効果をわかりやすく説明できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
1 実施計画策定	予習
2～7 計算機上への実装	システム実装
8～10 評価	評価法の実装
11～13 論文執筆	論文執筆
14 研究発表	準備
15 振り返り	

受講者の研究進度によって授業計画を変更する場合がある。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

- 取組み姿勢** 30%
各回の進捗度合い
- 論文執筆** 35%
論文の質
- 研究発表** 35%
発表内容の質

<テキスト/Textbook >

情報系関係書籍の他に、ACM、IEEE CS、情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、言語処理学会等、国内外各学会から発行されている論文誌、プロシーディングス、各出版社が発行している会議録などすべてがテキストとなり得る。研究テーマに応じて学会学生会員となり、それらの研究論文を参照できるようにしておくこと。

<参考文献/Reference Book >

Stack Overflow や Qiita といったインターネット上の技術情報共有サービスは、特に自身の研究を計算機上に実装する際に大いに役立つため、詳細に閲覧ができるようメンバ登録をしておくこと。

<参照 URL/URL >

- <https://www-mil.cis.doshisha.ac.jp/> メディア情報学研究室ホームページ
- <https://stackoverflow.com/> Stack Overflow
- <https://qiita.com/> Qiita

<授業形態備考/Class type >

本講義は基本的に対面で行うが、自身の健康等、大きなリスクを伴う場合は、履修登録前に申し出る必要がある。また、社会の情勢や大学の方針に変更があった場合は、それにしたがって授業形態を変更する場合がある。

<備考/Remarks >

文化情報学部が開設する学部開講科目のうち、受講生自身の研究遂行に関連のある科目は必要に応じて履修すること。

<概要/Course Content Summary >

マテリアルズ・インフォマティクスは、計算科学や情報科学の力で材料開発をスピードアップさせる試みである。本講義では、マテリアル探索をするうえで必要となる物性の知識を身に着け、データマイニングに必要な目的に合ったデータの収集法、収集したデータの加工技術、データの統計的分析法を学び、これらを経て得たデータを基に機械的学習とシミュレーションによって目的を達成する材料の構造・組成を予測し、探す方法やそれを作るための化学プロセスの最適化法を習得する。

<到達目標/Goals,Aims >

- 【知識】 統計学的な考え方の基、材料開発と化学プロセス分析ができるようになる。
 【技能】 シミュレーション技法と機械学習を組み合わせた高度化ができるようになる。
 【態度】 目的に応じた材料開発を帰納的に行うことができるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
第1回 マテリアルズ・インフォマティクス概要 先行研究について事例を紹介し、テーマとする物性を議論し決定する。	4 時間 (指定した文献を熟読し、関連について予習する)
第2回 文献調査 第1回で決定した物性やシミュレーション方法に関する文献を検索し、今後の実施計画を立てる。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第3回 統計分析 1 予め用意されたデータを用い, Excel を使って分布関数に関する演習を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第4回 統計分析 2 予め用意されたデータを用い, Excel を使って回帰分析に関する演習を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第5回 統計分析 3 予め用意されたデータを用い, Excel を使って推定・検定に関する演習を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第6回 実験計画法 1 データマイニングのための実験計画法について講義を受ける	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第7回 実験計画法 2 予め用意されたデータを用い, Excel を使って一元配置に関する演習を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第8回 実験計画法 3 予め用意されたデータを用い, Excel を使って一元配置に関する演習を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第9回 材料開発における機械学習 1 材料開発で利用された機械学習の事例について, 調査した内容を報告してもらい, 議論する。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第10回 材料開発における機械学習 2 予め用意されたデータを用い, 統計分析を行う (最小二乗, 主成分回帰)。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第11回 材料開発における機械学習 3 第10回と同じデータを用い, 統計分析を行う (推定・検定)。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第12回 材料開発における機械学習 4 第10回と同じデータを用い, サポートベクター回帰を行う。	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
第13回 材料開発における機械学習 3	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)

	第10回と同じデータを用い、ニューラルネットワークによる分析を行う。	
第14回	資料作成 これまでの演習で行った結果を基に各方法を比較し、その特徴についてまとめ、発表のためのポスターを作成する。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第15回	発表会 各自の実習結果を発表し，議論する。	6時間（実習の結果レポートとしてまとめ，提出する）

受講者と相談の結果，授業計画を変更する可能性がある

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(議論における積極性と作業の成果等) 20%

各回で実施する演習・作業の成果ならびに予習を踏まえた議論ができているのかを評価する。

レポート 40%

講義や演習，文献調査の内容を十分踏まえ，自身の考察がしっかりできているのかについて評価する。

プレゼンテーション 40%

聴衆に対して，分かりやすく，正確に実施内容を発表できているのかを評価する。

<授業形態備考/Class type >

基本的に対面で行う。

<概要/Course Content Summary >

マテリアルズ・インフォマティクスは、計算科学や情報科学の力で材料開発をスピードアップさせる試みである。本講義では、マテリアルの分析と探索をするうえで強力なツールとなるシミュレーションと機械学習の連成技術について修得し、目的を達成する材料の構造・組成を予測し、探す方法やそれを作るための化学プロセスの最適化法を習得する。

<到達目標/Goals,Aims >

- 【知識】 統計学的な考え方の基，材料開発と化学プロセス分析ができるようになる。
 【技能】 シミュレーション技法と機械学習を組み合わせた高度化ができるようになる。
 【態度】 目的に応じた材料開発を帰納的に行うことができるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
第1回 シミュレーションと機械学習 先行研究について事例を紹介し，テーマとする物性を議論し決定する。	4時間（指定した文献を熟読し，関連について予習する）
第2回 文献調査 第1回で決定した物性やシミュレーション方法に関する文献を検索し，今後の実施計画を立てる。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第3回 材料開発と統計力学1 ミクロとマクロの架け渡しとしてのアンサンブルの概念を修得し，簡単な演習を実施する。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第4回 材料開発と統計力学2 カノニカルアンサンブルについて理解し，演習を実施する。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第5回 材料開発と統計力学3 ミクロカノニカルアンサンブルについて理解し，演習を実施する。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第6回 材料開発と統計力学4 グランドカノニカルアンサンブルについて理解し，演習を実施する。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第7回 量子化学と機械学習 密度汎関数法の考えに基づくディープラーニングのモデルについて理解し，演習を行う。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第8回 シミュレーションプログラム実習1 分子動力学シミュレーションのフローを理解し，プログラミングする。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第9回 シミュレーションプログラム実習2 分子動力学シミュレーションのプログラミングを完了し，計算を実施する。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第10回 シミュレーションプログラム実習3 フェーズフィールドシミュレーションのフローを理解し，プログラミングする。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第11回 シミュレーションプログラム実習4 フェーズフィールドシミュレーションのプログラミングを完了し，計算を実施する。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第12回 分子間相互作用と機械学習 概要を講義し，言語を用いて簡単な例について計算を行う。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第13回 ディープラーニングによるポテンシャルフィット ポテンシャルを決定し，分子動力学シミュレーション	4時間（復習2時間，予習2時間）

	に適用し、ポテンシャルの違いによる結果の差異を議論する	
第14回	資料作成 これまでの演習で行った結果を基に各方法を比較し、その特徴についてまとめ、発表のためのポスターを作成する。	4時間（復習2時間，予習2時間）
第15回	発表会 各自の実習結果を発表し，議論する。	6時間（実習の結果レポートとしてまとめ，提出する）

受講者と相談の結果，授業計画を変更する可能性がある

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(議論における積極性と作業の成果等) 20%

各回で実施する演習・作業の成果ならびに予習を踏まえた議論ができているのかを評価する。

レポート 40%

講義や演習，文献調査の内容を十分踏まえ，自身の考察がしっかりできているのかについて評価する。

プレゼンテーション 40%

聴衆に対して，分かりやすく，正確に実施内容を発表できているのかを評価する。

<授業形態備考/Class type >

基本的に対面で行う

35620693

○モビリティネットワークシステム I

2 単位/Unit 春集中/Spring Intensive 京田辺/Kyotanabe 実験/Experiment

Mobility Network Systems I

佐藤 健哉

<概要/Course Content Summary >

インターネットを代表とするコンピュータネットワークは日進月歩で進化を続けており、移動環境においても次々と新しい技術が登場している。特に、移動する利用者の状態を把握するためのスマートフォンに加え、自動車やドローン、移動する各種センサ機器などの組み込みシステムもネットワーク機能が搭載されようになり、モノのインターネット (IoT: Internet of Things) 技術が注目されている。本講義では、このような移動環境を前提としたネットワーク分散システム (モビリティネットワークシステム) についての既存研究を学習し、新たな技術を生み出す方法や社会での活用する考え方を身につける。

<到達目標/Goals,Aims >

【知識】モビリティネットワークシステムの特性、ネットワーク接続、および、データ処理に関する知識を獲得する。

【技能】モビリティネットワークシステムの移動環境におけるネットワークプロトコル、センサデータ処理に関する技術を獲得する。

【態度】得られた結果から、どのような新しいシステム構築が実現可能かに関する考察が可能となる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
1 基礎技術確認：モビリティネットワークシステム関連の基礎技術を確認する。	講義内容の復習 (1 時間)
2 既存研究調査 1:モビリティネットワークシステムの関連研究や社会における役割を調査する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
3 既存研究調査 2:モビリティネットワークシステムの関連研究や社会における役割を調査する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
4 提案手法検討 2:モビリティネットワークシステムに関する独自に方式を提案する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
5 提案手法検討 2:モビリティネットワークシステムに関する独自に方式を提案する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
6 提案手法検討 3:モビリティネットワークシステムに関する独自に方式を提案する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
7 評価環境構築 1:提案した独自のモビリティネットワークシステムに関する方式を評価するための環境を構築する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
8 評価環境構築 2:提案した独自のモビリティネットワークシステムに関する方式を評価するための環境を構築する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
9 評価環境構築 3:提案した独自のモビリティネットワークシステムに関する方式を評価するための環境を構築する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
10 提案方式評価分析 1:提案した独自のモビリティネットワークシステムの評価・分析を行う。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
11 提案方式評価分析 2:提案した独自のモビリティネットワークシステムの評価・分析を行う。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
12 提案方式評価分析 3:提案した独自のモビリティネットワークシステムの評価・分析を行う。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
13 提案方式議論 1:提案した独自のモビリティネットワークシステムの技術をまとめ発表を通して議論を行う。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
14 提案方式議論 2:提案した独自のモビリティネットワークシステムの技術をまとめ発表を通して議論を行う。	講義内容の予習・復習, 論文執筆準備 (4 時間)
15 技術論文執筆:提案した独自のモビリティネットワークシステムの技術を技術論文としてまとめる。	講義内容の復習, 論文執筆 (4 時間)

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 50%

講義中の課題の実施内容, 議論内容について, 論理性, 独創性の観点から評価する。

技術論文 50%

提案方針に関する技術論文の新規性，有効性，信頼性，了解性の観点から評価する。

<テキスト/Textbook >

佐藤 健哉『コンピュータネットワーク』（共立出版）

河口 信夫，高田 広章，佐藤 健哉『つながるクルマーモビリティイノベーションシリーズ 3ー』（コロナ社，2020）

<授業形態備考/Class type >

PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。目安として，30Mbps 以上の通信速度，通信量制限が月 50GB 以上が望ましい。

<備考/Remarks >

コンピュータのプログラミング言語（たとえば，C 言語，Java，Python など）のうち1つを修得していることが求められる。「情報ネットワーク」あるいはそれに類する科目をこれまでに履修し，OSI 参照モデル，ネットワークプロトコル全般，および，TCP/IP に関する基本知識を習得していることが望ましい。

35620694

△モビリティネットワークシステムⅡ

2 単位/Unit 秋集中/Fall Intensive

京田辺/Kyotanabe 実験/Experiment

Mobility Network Systems II

佐藤 健哉

<概要/Course Content Summary >

インターネットを代表とするコンピュータネットワークは日進月歩で進化を続けており、移動環境においても次々と新しい技術が登場している。特に、移動する利用者の状態を把握するためのスマートフォンに加え、自動車やドローン、移動する各種センサ機器などの組込みシステムもネットワーク機能が搭載されようになり、モノのインターネット (IoT: Internet of Things) 技術が注目されている。本講義では、このような移動環境を前提としたネットワーク分散システム (モビリティネットワークシステム) についての既存研究を学習し、新たな技術を生み出す方法や社会での活用する考え方を身につける。

<到達目標/Goals,Aims >

【知識】モビリティネットワークシステムの特性、ネットワーク接続、および、データ処理に関する知識を獲得する。

【技能】モビリティネットワークシステムの移動環境におけるネットワークプロトコル、センサデータ処理に関する技術を獲得する。

【態度】得られた結果から、どのような新しいシステム構築が実現可能かに関する考察が可能となる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
1 基礎技術確認：モビリティネットワークシステム関連の基礎技術を確認する。	講義内容の復習 (1 時間)
2 既存研究調査 1:モビリティネットワークシステムの関連研究や社会における役割を調査する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
3 既存研究調査 2:モビリティネットワークシステムの関連研究や社会における役割を調査する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
4 提案手法検討 2:モビリティネットワークシステムに関する独自に方式を提案する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
5 提案手法検討 2:モビリティネットワークシステムに関する独自に方式を提案する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
6 提案手法検討 3:モビリティネットワークシステムに関する独自に方式を提案する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
7 評価環境構築 1:提案した独自のモビリティネットワークシステムに関する方式を評価するための環境を構築する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
8 評価環境構築 2:提案した独自のモビリティネットワークシステムに関する方式を評価するための環境を構築する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
9 評価環境構築 3:提案した独自のモビリティネットワークシステムに関する方式を評価するための環境を構築する。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
10 提案方式評価分析 1:提案した独自のモビリティネットワークシステムの評価・分析を行う。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
11 提案方式評価分析 2:提案した独自のモビリティネットワークシステムの評価・分析を行う。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
12 提案方式評価分析 3:提案した独自のモビリティネットワークシステムの評価・分析を行う。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
13 提案方式議論 1:提案した独自のモビリティネットワークシステムの技術をまとめ発表を通して議論を行う。	講義内容の予習・復習, 技術検討 (2 時間)
14 提案方式議論 2:提案した独自のモビリティネットワークシステムの技術をまとめ発表を通して議論を行う。	講義内容の予習・復習, 論文執筆準備 (4 時間)
15 技術論文執筆:提案した独自のモビリティネットワークシステムの技術を技術論文としてまとめる。	講義内容の復習, 論文執筆 (4 時間)

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 50%

講義中の課題の実施内容, 議論内容について, 論理性, 独創性の観点から評価する。

技術論文 50%

提案方針に関する技術論文の新規性，有効性，信頼性，了解性の観点から評価する。

<テキスト/Textbook >

佐藤 健哉『コンピュータネットワーク』（共立出版）

河口 信夫，高田 広章，佐藤 健哉『つながるクルマーモビリティイノベーションシリーズ 3ー』（コロナ社，2020）

<授業形態備考/Class type >

PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。目安として，30Mbps 以上の通信速度，通信量制限が月 50GB 以上が望ましい。

<備考/Remarks >

コンピュータのプログラミング言語（たとえば，C 言語，Java，Python など）のうち1つを修得していることが求められる。「情報ネットワーク」あるいはそれに類する科目をこれまでに履修し，OSI 参照モデル，ネットワークプロトコル全般，および，TCP/IP に関する基本知識を習得していることが望ましい。

<概要/Course Content Summary >

コンピュータを人間にとってもっと使いやすいものにするためには、これまでのより高速で、精密な計算能力を追求するコンピュータに関する研究の方向性とは異なり、少しでも人間に近づける知的化（人間化）の研究が重要になる。特に、人間と共存できる知能システムを実現するためには、様々な人工知能関連技術を融合すると共に、常識という切り口からシステムを構築する必要がある。本講義では、システム開発の遂行により創造力、総合的問題解決力を養うと共に、社会で直接役立つ幅広い情報処理技術、AI 関連技術を修得する。

なお、企業内研究所での勤務経験を有する教員が、当該研究所で習得した技術を基礎とした講義を行っている。

<到達目標/Goals,Aims >

(知識) 社会で直接役立つ幅広い情報処理技術、AI 関連技術を習得できるようになる。

(技能) 総合的問題解決力を養い、自ら創造できるようになる。

(態度) 様々なシステムを人と共存するという観点から捉えることができるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
1: 開発環境構築	作業 (2 時間)
2: 現状調査	作業 (2 時間)
3: 問題発見	作業 (2 時間)
4: 文献調査	作業 (2 時間)
5: システム提案	作業 (2 時間)
6: 議論 (1)	作業 (2 時間)
7: 再考	作業 (2 時間)
8: 再調査	作業 (2 時間)
9: システム再提案	作業 (2 時間)
10: 議論 (2)	作業 (2 時間)
11: テーマ確定	作業 (2 時間)
12: 開発環境再構築	作業 (2 時間)
13: 開発 (1)	作業 (2 時間)
14: 開発 (2)	作業 (2 時間)
15: 開発 (3)	作業 (2 時間)

学生の理解、課題の進捗に合わせて内容を変更する可能性がある。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

活動状況 30%

各活動の内容、進捗状況に応じて評価する

議論への参加 30%

議論での発言内容、理解度に応じて評価する

プレゼンテーション 40%

プレゼンテーションの内容、態度に応じて評価する

<概要/Course Content Summary >

コンピュータを人間にとってもっと使いやすいものにするためには、これまでのより高速で、精密な計算能力を追求するコンピュータに関する研究の方向性とは異なり、少しでも人間に近づける知的化（人間化）の研究が重要になる。特に、人間と共存できる知能システムを実現するためには、様々な人工知能関連技術を融合すると共に、常識という切り口からシステムを構築する必要がある。本講義では、常識的共生知能システム I に引き続き、システム開発の遂行により創造力、総合的問題解決力を養うと共に、社会で直接役立つ幅広い情報処理技術、AI 関連技術を修得する。
なお、企業内研究所での勤務経験を有する教員が、当該研究所で習得した技術を基礎とした講義を行っている。

<到達目標/Goals,Aims >

(知識) 社会で直接役立つ幅広い情報処理技術、AI 関連技術を習得できるようになる。
(技能) 総合的問題解決力を養い、自ら創造できるようになる。
(態度) 様々なシステムを人と共存するという観点から捉えることができるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
Week)	
1: テーマ確認	作業 (2 時間)
2: 開発 (1)	作業 (2 時間)
3: 開発 (2)	作業 (2 時間)
4: 開発 (3)	作業 (2 時間)
5: 中間発表	作業 (2 時間)
6: 議論	作業 (2 時間)
7: 開発 (4)	作業 (2 時間)
8: 開発 (5)	作業 (2 時間)
9: 開発 (6)	作業 (2 時間)
10: 開発 (7)	作業 (2 時間)
11: 評価準備 (1)	作業 (2 時間)
12: 評価準備 (2)	作業 (2 時間)
13: 評価 (1)	作業 (2 時間)
14: 評価 (2)	作業 (2 時間)
15: 最終発表	作業 (2 時間)

学生の理解、課題の進捗に合わせて内容を変更する可能性がある。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

活動状況 30%

各活動の内容、進捗状況に応じて評価する

議論への参加 30%

議論での発言内容、理解度に応じて評価する

プレゼンテーション 40%

プレゼンテーションの内容、態度に応じて評価する

<概要/Course Content Summary >

人間が書いたり話したりする言葉を機械で処理する自然言語処理の諸技術の理解を具体的な技術課題の解決を通して深める。本講義では、自然言語処理技術の中でも特に、深層学習などの機械学習による自然言語処理技術を中心に学ぶ。企業内研究所での勤務経験を有する教員が、当該研究所で習得した技術を基礎とした講義を行っている。なお、学外で発表できる成果が得られた場合には、国内・国外の学会で発表を行う。

<到達目標/Goals,Aims >

知識：機械学習による自然言語処理の諸技術を理解できるようになる。
 技能：機械学習による自然言語処理の課題解決を通して、課題を深く理解できるようになる。
 態度：機械学習による自然言語処理の課題の検討結果を的確に表現できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / Week)	(内容/Contents)	(授業時間外の学習 / Assignments)
第1回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第2回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第3回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第4回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第5回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第6回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第7回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第8回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第9回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第10回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第11回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第12回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第13回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第14回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第15回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究

ゼミ形式 (テキストは別途指示する)

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点 60%
 ゼミでの発表と討議内容
 提出物 40%

<概要/Course Content Summary >

人間が書いたり話したりする言葉を機械で処理する自然言語処理の諸技術の理解を具体的な技術課題の解決を通して深める。本講義では、自然言語処理技術の中でも特に、深層学習などの機械学習による自然言語処理技術を中心に学ぶ。企業内研究所での勤務経験を有する教員が、当該研究所で習得した技術を基礎とした講義を行っている。なお、学外で発表できる成果が得られた場合には、国内・国外の学会で発表を行う。

<到達目標/Goals,Aims >

知識：機械学習による自然言語処理の諸技術を理解できるようになる。
 技能：機械学習による自然言語処理の課題解決を通して、課題を深く理解できるようになる。
 態度：機械学習による自然言語処理の課題の検討結果を的確に表現できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / Week)	(内容/Contents)	(授業時間外の学習 / Assignments)
第 1 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 2 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 3 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 4 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 5 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 6 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 7 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 8 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 9 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 10 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 11 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 12 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 13 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 14 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究
第 15 回	修士論文研究およびゼミ (先行研究調査, 実験, 結果の分析, 資料作成, 進捗打ち合わせ・議論を含む)	修士論文研究

ゼミ形式 (テキストは別途指示する)

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点 60%
 ゼミでの発表と討議内容
 提出物 40%

ゼミの発表資料, 修士論文

<概要/Course Content Summary >

人工知能や機械学習の発展に伴い、データを収集し、それらのデータを安全に届けられる高信頼ネットワークの重要性が増している。本講義では、情報通信ネットワークをはじめとする様々なネットワークにおける高信頼化を実現する手法について学ぶ。具体的には、既存の論文を調査し、それらの内の一つの追実験を行うことで、高信頼ネットワークの手法について知識を深める。

<到達目標/Goals,Aims >

(知識) ネットワークの高信頼化に関する知識を獲得する。
(技能) 高信頼化を実現する手法をプログラミングでき、性能評価を行えるようになる。
(態度) ネットワークの高信頼化について積極的に議論できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
1 高信頼ネットワークの概要説明	復習 (2 時間)
2 文献調査 1: 高信頼ネットワークの文献を調査	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
3 文献調査 2: 追実験を行う文献を選定する	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
4 文献発表: 追実験を行う文献について発表する	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
5 実験環境構築 1: シミュレーションなどの実験を行うために実験環境の構築を行う	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
6 実験環境構築 2: 前回に引き続き、実験環境の構築を行う	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
7 実験プログラム作成 1: 追実験を行うプログラムを作成する	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
8 実験プログラム作成 2: 前回に引き続き、プログラムの作成を行う	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
9 実験プログラム作成 3: 前回に引き続き、プログラムの作成を行う	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
10 中間発表・議論: プログラムの作成状況を発表し、議論する	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
11 実験プログラム作成 4: 中間発表の議論を踏まえ、プログラムの作成を行う	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
12 実験プログラム作成 5: 前回に引き続き、プログラムの作成を行う	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
13 実験プログラム作成 6: 前回に引き続き、プログラムの作成を行う	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
14 発表会: 追実験の結果についてまとめ、報告する	予習 (2 時間) 復習 (2 時間)
15 資料作成: 一連の実習の結果を資料にまとめる	復習 (2 時間)

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

レポート 60%
先行研究・追実験の結果をまとめたレポートの内容で評価する
プレゼンテーション 40%
発表会のプレゼンテーションの内容で評価する

<授業形態備考/Class type >

基本的に対面で実施する。

<概要/Course Content Summary >

人工知能や機械学習の発展に伴い、データを収集し、それらのデータを安全に届けられる高信頼ネットワークの重要性が増している。本講義では、情報通信ネットワークをはじめとする様々なネットワークにおける高信頼化を実現する手法について学ぶ。具体的には、既存の論文を調査し、それらの内の一つの追実験を行うことで、高信頼ネットワークの手法について知識を深める。

<到達目標/Goals,Aims >

- (知識) ネットワークの高信頼化に関する知識を獲得する。
 (技能) 高信頼化を実現する手法をプログラミングでき、性能評価を行えるようになる。
 (態度) ネットワークの高信頼化について積極的に議論できるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
1 高信頼ネットワークの概要説明	復習 (2時間)
2 文献調査 1: 高信頼ネットワークの文献を調査	予習 (2時間) 復習 (2時間)
3 文献調査 2: 追実験を行う文献を選定する	予習 (2時間) 復習 (2時間)
4 文献発表: 追実験を行う文献について発表する	予習 (2時間) 復習 (2時間)
5 実験環境構築 1: シミュレーションなどの実験を行うために実験環境の構築を行う	予習 (2時間) 復習 (2時間)
6 実験環境構築 2: 前回に引き続き、実験環境の構築を行う	予習 (2時間) 復習 (2時間)
7 実験プログラム作成 1: 追実験を行うプログラムを作成する	予習 (2時間) 復習 (2時間)
8 実験プログラム作成 2: 前回に引き続き、プログラムの作成を行う	予習 (2時間) 復習 (2時間)
9 実験プログラム作成 3: 前回に引き続き、プログラムの作成を行う	予習 (2時間) 復習 (2時間)
10 中間発表・議論: プログラムの作成状況を発表し、議論する	予習 (2時間) 復習 (2時間)
11 実験プログラム作成 4: 中間発表の議論を踏まえ、プログラムの作成を行う	予習 (2時間) 復習 (2時間)
12 実験プログラム作成 5: 前回に引き続き、プログラムの作成を行う	予習 (2時間) 復習 (2時間)
13 実験プログラム作成 6: 前回に引き続き、プログラムの作成を行う	予習 (2時間) 復習 (2時間)
14 発表会: 追実験の結果についてまとめ、報告する	予習 (2時間) 復習 (2時間)
15 資料作成: 一連の実習の結果を資料にまとめる	復習 (2時間)

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

レポート 60%

先行研究・追実験の結果をまとめたレポートの内容で評価する

プレゼンテーション 40%

発表会のプレゼンテーションの内容で評価する

<授業形態備考/Class type >

基本的に対面で実施する。

<概要/Course Content Summary >

本学では、来たる人間中心の社会、すなわち Society 5.0 を実現可能にする人やモノのより良いつながりを Community 5.0（以下「Comm5.0」）と捉え、AI 技術の基礎知識を持ち、各専門分野において新たな Comm5.0 の世界を創造できる素養を持つ人物を「Comm5.0 アーキテクト」と定義した。本講義では、Comm5.0 アーキテクトを養成するために、最先端や将来重要となる技術を調査する。その知識をもとに、将来の社会やコミュニティのあり方について考察する技術を獲得する。

<到達目標/Goals,Aims >

【知識】 これからの社会で重要となる技術、知識は何かを知ること。【技能】 これからの社会で重要となる技術と、社会およびコミュニティとを結びつけて多角的にことがらを掴めるようになること。【態度】 これからの社会で重要となる技術が社会にどのような影響を与え、どのような新しい対立しているように見える二つのことがらを連続的に捉えていけるようになること。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / 内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
1 はじめに	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
2 情報化社会 1	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
3 情報化社会 2	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
4 情報化社会 3	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
5 AI 1	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
6 AI 2	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
7 AI 3	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
8 Scociety 5.0 1	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
9 Scociety 5.0 2	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
10 Scociety 5.0 3	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
11 Community 5,0 1	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
12 Community 5,0 2	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
13 Community 5,0 3	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
14 振り返り	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)
15 まとめ	4 時間 (復習 2 時間, 予習 2 時間)

学生の進捗、興味に合わせて授業計画の変更あり。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点 (出席, 議論への参加) 30%

提出物 70%

レポートなど

<備考/Remarks >

対面授業と非対面授業 (リアルタイム, オンデマンド) を併用して実施する。準備すること。PC やタブレット接続するインターネットへの接続環境を整備すること。目安として、30Mbps 以上の通信速度、通信量制限が月 50GB 以上が望ましい。

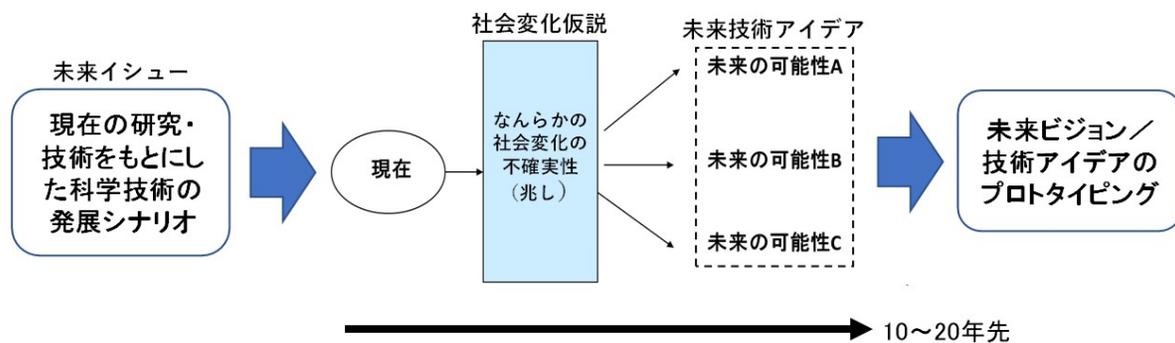
<概要/Course Content Summary >

今の自分を未来に置くことによって将来世代の視点に立った技術アイデアを発想し、デザイン思考に基づく新技術プロトタイプングを実習する。

本科目は、学内の研究科横断型の教育科目の枠を超えて、大学と企業との組織の壁を超える「協創」ワークショップ方式をベースにした演習科目である。この方式により、地球環境について自然科学的かつ人文科学的な手法を用いて主要課題を抽出・整理し、課題解決へのスキームを「協創」する。これにより未来を俯瞰して行動する人物・人材の育成を行い、同志社大学発の新たな「環境科学」の創出を目指す。

この科目の履修により、複数の専門性や俯瞰力、コーディネート力が習得でき、学術成果を実際の社会で活用することを可能とするばかりでなく、科学技術の観点のみの環境の行き詰まりを打開するビジネス提案が可能となる。

フューチャーデザイン演習の流れとテーマ



2022年度テーマ

『未定～調整中～』

<到達目標/Goals,Aims >

(1) 様々なバックグラウンドをもつ学生（人文系を含む），研究者・技術者が参加するワークショップを開催し，10～20年先程度の未来を想定して，目前の社会・環境変化による様々な「兆し」から社会変化をシナリオ化（社会変化仮説）する。

(2) この新たな社会ニーズに対して，科学的・専門知識を持つWS参加者が，事前に問題意識や仮説を記述した未来イシュー（注目すべき未来技術）を掛け合わせるアイデア発想マトリクス（強制推論）の手法により，未来技術アイデアを大量に生み出す。

(3) ユーザー目線，開発・製造者目線からのグループ討議を経て，有望な未来技術アイデアを選定し，教員等からの建設的な助言（アンケート）を得て，想定する社会変化シナリオの下に実装可能な技術ビジョンへとブラッシュアップし，具体的な革新的デバイスを発案する（プロトタイプング）。

<授業計画/Schedule >

（実施回 / 内容/Contents）

Week)

- # 1 進め方説明 ※グループ分け
- # 2 スキャニングマテリアルからアイデアシート作成（個人単位）
- # 3 社会変化シナリオのとりまとめ（グループ単位）
- # 4 シナリオの報告・共有 ※社会変化仮説のとりまとめ
- # 5 技術資料から未来イシュー作成（個人単位）

- # 6 未来 이슈のとりまとめ (グループ単位)
- # 7 未来技術アイデアの発想 (個人単位)
- # 8 未来技術アイデアのとりまとめ (グループ単位)
- # 9 中間報告
- # 10 テーマとゴール設定 ※再グループ分け
- # 11 新技術のプロトタイピング (個人単位)
- # 12 新技術のプロトタイピング (グループ単位)
- # 13 開発ロードマップの検討 (個人単位)
- # 14 開発ロードマップのとりまとめ (グループ単位)
- # 15 成果報告 ※発表会開催

(1) グループ演習では、議論の進捗に応じたウェブ上での情報検索、グループ討議の経過共有のためのプレゼン資料作成など、PCを使った作業が発生します。このため、受講者は各自のPC持参が望まれます。

(2) 講義はワークショップ形式にて進行する都合上、15回分を計4日の集中講義にて実施します。グループ討議での活発なアイデア創出が重要なため、やむを得ない場合を除き、各回の集中講義に全て参加できることを履修条件といたします。

(3) 2022年度の開講日は、次の4日間です。11/26(土)、12/3(土)、12/10(土)、12/17(土)。最終日のみ午前中で終了としますが、他の日程は全て終日(9:30~17:00)の集中講義とします。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, グループ作業の成果等) 60%

クラスで発表など 20%

提出物 20%

グループ演習ですので、グループ内のコミュニケーションをいかに活性化したか、またアイデアの発案に貢献できたかが評価のポイントとなります。

<参考文献/Reference Book >

驚田祐一編著『未来洞察のための思考法—シナリオによる問題解決—』(勁草書房, 2016), ISBN:9784326504244, 未来洞察手法の開拓者による説明書。特に、第2章が参考になります。

<備考/Remarks >

本科目は、対面で演習を行う。

<概要/Course Content Summary >

様々な情報が多岐にわたる手段により発信されている今日では、情報の真贋を確かめたり、社会的・文化的現象の本質を解き明かにしたりする能力がますます求められている。本特別演習は、変容する社会の様相や人々の考え方を把握するためのより複雑な社会調査の企画・設計・実施、調査結果の整理・分析などの実践的な知識と技能を習得させる。具体的には、統計的調査方法論に則った「仮説検証型」と「事実発見型」調査の企画と設計、調査方法の決定、調査票の設計、標本抽出の理論と方法、調査データの整理、無回答問題の対応、量的分析と質的分析などを調査実践により理解させると同時に、調査報告書およびデータ解析に基づく学術論文の作成に関する技法を身につけさせる。履修者は、この特別演習で独自に社会調査理論の理解を深めると同時に、調査の企画・実施、調査結果の整理・分析に関するノウハウと実践能力を身につけることができる。

<到達目標/Goals,Aims >

- 1.社会調査理論の本質を理解できるようにする。
- 2.調査の企画・実施、結果の整理・分析のノウハウと実践能力を習得することができるようになる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents) Week)	(授業時間外の学習/Assignments)
1 社会調査の理論的特徴および意義：他の諸調査研究方法に比べながら、社会調査の特徴、必要性、有効性、問題点に関する諸事項について把握	講義の復習と関連文献の閲覧
2 複雑な社会的・文化的現象と社会調査：現代社会における諸現象を取り扱う社会調査の役割、具体的企画、設計、実施に関する要領を理解	講義の復習と関連文献の閲覧
3 社会調査の企画と設計：調査の理論的枠組、調査対象範囲の決定・抽出、データ獲得の過程、データの整理・分析などの実践的な技能を習得	講義の復習と関連文献の閲覧
4 サンプル理論：事象の本質を解明するためのサンプリングの活用法および調査環境の変化に適応した新しい標本抽出法について理解	講義の復習と関連文献の閲覧
5 複雑系サンプリングの実践：対象や母集団の構成が複雑である場合の層化抽出および多段抽出の具体的な操作を事例により演習	講義の復習と関連文献の閲覧
6 調査票の設計：「仮説検証型」調査と「事実発見型」調査の調査票の構成、質問項目の作成、計測尺度、ワーディングなどの理論と技法を演習	講義の復習と関連文献の閲覧
7 調査の実施：実施方法の決め方、諸実施方法の特徴、調査現場の管理方法などを理解させると同時に、複数の調査実施方法による調査を実施	講義の復習と関連文献の閲覧
8 調査データの整理：エディティング、コーディング、データクリーニング、論理チェック、コードブックとフィールドノートの作成などを実践	講義の復習と関連文献の閲覧
9 調査データの集計：集計の意義と調査データの有効な集計方法の理解、集計表の作成などを実施	講義の復習と関連文献の閲覧
10 量的データの分析：重要な統計グラフ作成・統計量計算によるデータの要約を実践させ、多変量解析による関連性の解明方法を理解	講義の復習と関連文献の閲覧
11 質的データの分析：質的データにおける度数の意義、クロス表の検定作業を操作させ、定性的多変量解析技法の使い分けを理解	講義の復習と関連文献の閲覧
12 調査結果報告書と学術論文の作成：調査報告書の作成、データ分析を柱とする学術論文の作成に関する一連の技法と注意点などを実践的に理解	講義の復習と関連文献の閲覧
13 無回答問題の対処：各種形式の無回答の特徴、影響、発生原因、対応方法などについて理解	講義の復習と関連文献の閲覧
14 国際比較調査の要件：比較可能性と等価性、標本抽出法の構築、調査票の設計・翻訳、調査実施方法の選定および留意点について習得	講義の復習と関連文献の閲覧
15 まとめと全体総括	講義の復習と関連文献の閲覧

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点（出席、クラス参加、グループ作業の成果等） 25%

出席状況及び提出課題の完成度

中間レポート試験 25%

演習技法に対する理解の度合

期末レポート試験・論文 50%

演習内容に対する総合的理解の度合

<テキスト/Textbook >

本特別演習は、担当者が作成する資料を基に進める。

<参考文献/Reference Book >

毎回の授業中で指定する。

<備考/Remarks >

- ・本授業は対面で行うが、場合によって Teams か Zoom による双方向オンラインへ変更する。詳細は随時連絡する。
- ・担当教員との連絡は e-mail や e-class にて行う。

35620654

△SDGs のための知的研究開発手法

2 単位/Unit

秋学期/Fall

京田辺/Kyotanabe

演習/Seminar

Research Methods for SDGs

後藤 琢也

石川 正道

<概要/Course Content Summary >

本科目は、「回収・分解・選別・再利用（廃棄）」のサイクルをあらかじめ考慮する研究・開発マネジメントを学ぶ文理統合演習科目である。本手法は、単純な環境問題を解決するための方策を講じるだけにとどまらず、人にとって社会にとって居心地の良い技術に必要な研究・開発マネジメントの手法を学ぶ。この考え方を習得するために、実務家教員から学ぶことはもちろんのこと、社会人との共修を通じて、自身の研究活動の活性化やキャリア形成にも寄与する科目である。授業は、まず（1）SDGs 概論からはじまり、以降、（2）研究戦略立案のための知的手法、（3）技術システム開発の実際（数名の実務家教員に講義・討論）を経て、（1）から（3）の項目について、あらかじめ提出したレポートに基づきパネルディスカッションを行う。授業は、原則双方向オンライン型授業とする予定である。

<到達目標/Goals,Aims >

本科目は、SDGs が掲げる 17 の目標の一つである「作る責任つかう責任」に配慮した研究開発マネジメントの実際を学ぶことを目標とする。

現代社会が直面する環境問題を解決するために必要な「回収・分解・選別・再利用（廃棄）」のサイクルがあらかじめ考慮された技術システムの構築ができる知識、技能を習得する。加えて、本科目でとりあげるマネジメント手法は、環境問題を解決するための方策を講じることにとどまらず、人にとって社会にとって居心地の良い技術を提供するためにも役立つという態度を具備することも重要な到達目標である。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)

Week)

(実施回 / (内容/Contents)	(授業時間外の学習/Assignments)
1 SDGs 概論 1-1: SDGs の概要と歴史について学修する。(担当: 後藤)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
2 SDGs 概論 1-2: SDGs が提起する社会課題について学修する。(担当: 後藤)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
3 SDGs 概論 1-3: 「回収・分解・選別・再利用」を考慮した研究開発について学修する。(担当: 後藤)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
4 SDGs 概論 1-4: 1-1 から 1-3 で学修したことを題材としてパネルディスカッションを実施し、レポートを作成する。(担当: 後藤)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
5 研究戦略立案のための知的手法 2-1: 研究戦略とロードマップについて学修する。(担当: 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
6 研究戦略立案のための知的手法 2-2: イノベーションデザインの方法について学修する。(担当: 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
7 研究戦略立案のための知的手法 2-3: 2-1 から 2-3 で学修したことを題材としてパネルディスカッションを実施し、レポートを作成する。(担当: 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
8 技術システム開発の実際 3-1: 国際宇宙探査における研究開発マネジメントについて学修する。(担当: ゲストスピーカー, 後藤, 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
9 技術システム開発の実際 3-2: 国際宇宙探査のケーススタディから開発方法について学ぶ (担当: ゲストスピーカー, 後藤, 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
10 技術システム開発の実際 3-3: 3-1 と 3-2 で学修したことを題材としてパネルディスカッションを実施し、レポートを作成する。(担当: ゲストスピーカー, 後藤, 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
11 技術システム開発の実際 4-1: 企業における研究開発マネジメントについて学修する。(担当: ゲストスピーカー, 後藤, 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)

12	技術システム開発の実際 4-2: 企業における研究開発のケーススタディから開発方法について学ぶ (担当: ゲストスピーカー, 後藤, 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
13	技術システム開発の実際 4-3: 4-1 と 4-2 で学修したことを題材としてパネルディスカッションを実施し, レポートを作成する。(担当: ゲストスピーカー, 後藤, 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
14	総括パネルディスカッション: 1-4, 2-3, 3-2, 4-2 で提出したレポートに基づき, パネルディスカッションを実施し, 総括レポートを作成する。(担当: 後藤, 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)
15	総括: 講義の総括を行う。(担当: 後藤, 石川)	関連事項について予習しておくこと (4 時間)

受講者と相談の結果, 授業計画を変更する可能性がある。その際は, e-mail 等で連絡を行う。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

小レポート 65%

講義内容の理解度について評価する。

グループ発表 35%

講義内容に関連する発表内容を評価する。

講義内容の把握を小レポート並びにグループ発表で測る。小レポートでは, 自らの力でレポートを作成すること, 要求された課題に対して論理的に論じることを求める。なお, 評価方法は状況により変わることがありうる。

<備考/Remarks >

本科目は双方向型会議形式, オンデマンド形式, 対面形式で実施する可能性があり, 今後の新型コロナウイルスの状況次第では, 実施方法を変更する可能性がある。変更の場合は別途指示する。

35620661-001

△ミッション研究 I-1

2 単位/Unit

秋学期/Fall

京田辺/Kyotanabe

実習/Practical training

Mission Research I-1

廣安 知之

<概要/Course Content Summary >

テクノロジーが急速かつ継続的に変化し、そのテクノロジーが社会やコミュニティへ影響を及ぼす時代において、変化への適応力が必要になると言われている。そこでは、テクノロジーの知識や技術を取得するだけでなく、それらを活用する実践のフェーズが重要である。本講義では、学内の卓越した研究者および連携組織との共同研究を学生自らが主体的に進めて行く。これを通じて、学生自身がこれまでに学び得てきた知識・技術の体系化、また、現在あるいはこれからの社会動向やニーズについて自ら考える能力を涵養することで、これからの社会に広く貢献できる人物の養成を狙う。

<到達目標/Goals,Aims >

【知識】現在あるいはこれからの社会動向やニーズは何かを知る。【技能】関連教員および連携組織とコミュニケーションを取りながら問題を解決できる。【態度】限られた時間の中で実行可能な研究計画を主体的に立案し、自身の知識・技術を活かして研究を遂行できる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)

(授業時間外の学習/Assignments)

Week)

1	はじめに 授業概要	復習(4 時間)
2	テーマ設定の調査 1	授業内で指示される課題の遂行と準備(4 時間)
3	テーマ設定の調査 2	授業内で指示される課題の遂行と準備(4 時間)
4	テーマ設定の調査 3	授業内で指示される課題の遂行と準備(4 時間)
5	テーマ設定の調査 4	授業内で指示される課題の遂行と準備(4 時間)
6	テーマとゴールの設定	プレゼンテーションの準備(4 時間)
7	テーマとゴールのブラッシュアップ	プレゼンテーションの準備(4 時間)
8	課題の実行 1	課題と問題解決(4 時間)
9	課題の実行 2	課題と問題解決(4 時間)
10	課題の実行 3	課題と問題解決(4 時間)
11	課題の実行 4	課題と問題解決(4 時間)
12	課題の実行 5	課題と問題解決(4 時間)
13	課題の実行 6	課題と問題解決(4 時間)
14	成果報告	プレゼンテーションの準備(4 時間)
15	まとめ	振り返り(4 時間)

具体的な研究テーマは関連教員および連携組織との議論で決定する。
授業計画は、学生の進捗に合わせて変更する可能性あり。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, 作業の成果等) 50%

出席, 課題の設定, 成果報告など総合的に判断する

提出課題 50%

課題の提出の期限が守られているか, 内容はどうかなどがポイントである。

<備考/Remarks >

登録人数調整を行う可能性あり。

対面・非対面授業の実施は、関連教員および連携組織との議論の中で決定する。

35620681-001

○ミッション研究Ⅱ-1

2 単位/Unit

春学期/Spring

京田辺/Kyotanabe

実習/Practical training

Mission Research Ⅱ-1

廣安 知之

<概要/Course Content Summary >

テクノロジーが急速かつ継続的に変化し、そのテクノロジーが社会やコミュニティへ影響を及ぼす時代において、変化への適応力が必要になると言われている。そこでは、テクノロジーの知識や技術を取得するだけでなく、それらを活用する実践のフェーズが重要である。本講義では、学内の卓越した研究者および連携組織との共同研究を学生自らが主体的に進めて行く。これを通じて、学生自身がこれまでに学び得てきた知識・技術の体系化、また、現在あるいはこれからの社会動向やニーズについて自ら考える能力を涵養することで、これからの社会に広く貢献できる人物の養成を狙う。

<到達目標/Goals,Aims >

【知識】現在あるいはこれからの社会動向やニーズは何かを知る。【技能】関連教員および連携組織とコミュニケーションを取りながら問題を解決できる。【態度】限られた時間の中で実行可能な研究計画を主体的に立案し、自身の知識・技術を活かして研究を遂行できる。

<授業計画/Schedule >

(実施回 / (内容/Contents)

(授業時間外の学習/Assignments)

Week)

1	はじめに 授業概要	復習(4 時間)
2	テーマ設定の調査 1	授業内で指示される課題の遂行と準備(4 時間)
3	テーマ設定の調査 2	授業内で指示される課題の遂行と準備(4 時間)
4	テーマ設定の調査 3	授業内で指示される課題の遂行と準備(4 時間)
5	テーマ設定の調査 4	授業内で指示される課題の遂行と準備(4 時間)
6	テーマとゴールの設定	プレゼンテーションの準備(4 時間)
7	テーマとゴールのブラッシュアップ	プレゼンテーションの準備(4 時間)
8	課題の実行 1	課題と問題解決(4 時間)
9	課題の実行 2	課題と問題解決(4 時間)
10	課題の実行 3	課題と問題解決(4 時間)
11	課題の実行 4	課題と問題解決(4 時間)
12	課題の実行 5	課題と問題解決(4 時間)
13	課題の実行 6	課題と問題解決(4 時間)
14	成果報告	プレゼンテーションの準備(4 時間)
15	まとめ	振り返り(4 時間)

具体的な研究テーマは関連教員および連携組織との議論で決定する。
授業計画は、学生の進捗に合わせて変更する可能性あり。

<成績評価基準/Evaluation Criteria >

平常点(出席, クラス参加, 作業の成果等) 50%

出席, 課題の設定, 成果報告など総合的に判断する

提出課題 50%

課題の提出の期限が守られているか, 内容はどうかなどがポイントである。

<備考/Remarks >

登録人数調整を行う可能性あり。

対面・非対面授業の実施は、関連教員および連携組織との議論の中で決定する。